the King Of Fighters NEW GENERATION

昆布さん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アデスとの戦いから２０年。ボンゴレ十代目となった沢田綱吉！

一端の社会人として生きる草薙京！彼らの息子達に白い封筒が届けられたとき、新たな戦いが幕を開ける。

古いようで新しく、新しいようで古い。幕末浪漫が現代に蘇るのだ。

１／１５　みてみん様にキャラクターのイメージイラストを上げさせていただきました。

目次

プロローグ　青龍、来る！ ―― 1
ＲＯＵＮＤ１　新しい世代 ―― 3
主要３チーム紹介 ―― 15
ＲＯＵＮＤ２　招待状、来る！ ― 23
ＲＯＵＮＤ３　チーム揃う ―― 36
ＲＯＵＮＤ４　ＫＯＦ、再び ―― 47
ＲＯＵＮＤ５　楓、立つ！ ―― 54
ＲＯＵＮＤ６　新たなる神器、来る！ 62
ＲＯＵＮＤ７　ボンゴレＸＩ世、来る！ ―― 77
ＲＯＵＮＤ８　燃える因縁 ―― 87
ＲＯＵＮＤ９　なまっとりゃーせんが！ ユウキ、怒りのネオジオ乱舞！ ― 94
ＲＯＵＮＤ１０　はばたけ！ＦＲＹＥＲＳ！ ―― 103
ＲＯＵＮＤ１０＋　幕末浪漫… ― 112
ＲＯＵＮＤ１１　楓の予感 ―― 116
ＲＯＵＮＤ１２　燃える鳳凰 ―― 119
ＲＯＵＮＤ１３　そっくりさん!?楓対ロック！ ―― 128
ＲＯＵＮＤ１４　本戦終了!そして… 137
ＲＯＵＮＤ１５　邪魔をするな！ 144

ＲＯＵＮＤ１６　門を閉ざせ！　―― 149
ＥＮＤＩＮＧ　そして…　―― 162
スタッフロール　―― 172
Ｋ，―九条翔のトラウマ　―― 180

プロローグ　青龍、来る！

弘化３年９月１４日生まれ、身長は５尺８寸、目方は１６貫目。そのはずだった。
僕の名前は楓。ただの剣客だった…
それが何で…歳は数えで２５歳、うん変わっていない。そこらにある物の反射で年格好が変わってないの
が分かった。でも…
「ここはどこだ？っ…て言うか…」
（ああ、そもそもどこなんて次元じゃないな。なんなんだコレ？）
自分の内側から声が浮上してくる。もう一人の僕だ。
しかし彼と喋ってる場合じゃなさそうだ。何故って？鉛玉が大量に飛んできたからだ。
なんなんだこの武器は!?
（オイッ！あの球体には触れるんじゃねえぞ！）
飛んできた緑色の球体を見てもう一人の僕は警告の声を発する。
「なんで!?」

（ありゃあ爆発物だ！それに数も多い！疾風丸はどうした!?）
「ちゃんと手元にあるけど…どうするんだ?」
（ウダウダ言ってるヒマはねえ！身体を借りるぜ相棒！）
「プハァッ！久しぶりの自由…お前らを倒して満喫させてもらうぜ！」
（殺すなよ、てか終わったら主導権取り返すから。）
「へいへい。」
いいながら俺は愛刀疾風丸を抜き、右手一本で構える。
飛んでくる鉛玉を切り払いながら俺は叫んだ。
「そんな飛び道具が俺に効くか！俺を倒したかったら剣客連れてこい！並じゃねえのをなあ！」

ＲＯＵＮＤ１　新しい世代

私立並盛高校一年三組。
ただでさえただ事ではない校内でひときわ異彩を放つ空間である。
と、そこで退屈そうにしている栗色の髪に白いメッシュの入った少年が黒髪の赤いキャップを被った少年に
声をかけた。
「明人、面白いことねえか?」
「無い、いつもそれだな栄助は、面倒くさがりのくせに。」
そこにもう一人、茶髪の少年が話しかけてきた。いつも一緒にいる銀髪と黒髪も一緒だ。
「今日さ、新任の先生が来るらしいよ。」
「何!?本当か吉久!?弘、宏人、どう言うことだ!?こんな時期外れに」
栗色の髪の少年、九条栄助がびっくりして聞いた。今は五月、人事異動の月じゃない。
それに赤キャップの草薙明人が
「なんか訳ありなんだろ、いいじゃねえか、仲良くなれりゃそれでいいと思うぜ。」

それにもう一人の黒髪、山本宏人も頷いている。しかし銀髪の獄寺弘は後頭部でポニーテールのようにまとめた髪を振り乱し、隣にいる沢田吉久を指して
「おめえら！若大将にもしもの事があったらどうする気だ！」
と、彼らの父親たちの姿を彷彿とさせる叫び声を上げた。
『おめえら！十代目にもしもの事があったらどうする気だ！』
なんというか、弘の父は間違いなくこんな台詞を吐いている。吉久の父親に向かって。
ちなみに、弘は一般的な男性よりも荒っぽく、ガサツだがれっきとした女性だ。
「大丈夫だろ、そうなる前になんかあったら俺の草薙流がうなるぜ。心配すんなよ。」
明人がそう言って手にはめたグローブに入った日輪の意匠を見せつけた。
と、そこでチャイムが鳴り、
「おーいみんな席に着けー、今日からこのクラスの副担任になる先生がお待ちかねだぞー。」
と、冴えない中年教師の声が響いた。
さっきまで喋っていた彼らがどたばたと席に着くと黒髪の青年が入ってきた。
「じゃあ、自己紹介を。」
「はい、皆さん初めまして、僕の名前は蒼月楓、２００７年生まれの２５歳です、古典の

担当とこのクラスの副担任、並びに剣道部の顧問をさせていただきます。仲良くしていきましょう、では。」

・・・・・

並盛町にある安アパートの一室の鍵を開けてその部屋の主である青年が帰ってきた。

「ふう…初日は疲れるな…」

そういってつけた照明に照らされた顔は黒髪の端整な顔立ち、並盛高校一年三組の副担任である蒼月楓だ。

布団、ガスコンロ、仕事用の机、一人分の食器、中古で買った箱形のテレビという必要最低限のものしか存在しない殺風景な部屋で彼は夕食を作りながらここに至るまでの過程を思い出していた。

部屋の隅に置かれた細長い包みは大切な愛刀疾風丸だ。

マフィア間の抗争に巻き込まれた楓はマフィア界最強の剣士の山本武と剣を交えた後、和解、ボンゴレファミリーに保護された。

そして、ボンゴレによって巧妙に偽造された蒼月楓という人間の戸籍と高校教師という職を手に入れたのだ。

「ご馳走様でした。」

食べ終わった食器を洗い、生ゴミを片付けて明日の仕事の用意をして眠る。

「兄さん、鷲塚さん、響さん…みんなどうしているだろう…」
およそ１７０年の時を越えてしまった楓はもといた時代でゆかりのある人間達に思いをはせると、ゆっくりと眠りに入っていった。
（あかりさん…）
意識が闇の中に消えていく直前に想ったのは二人で旅をしてきた陰陽師の女性、一条あかりのことだけだった。
・・・・・
翌日の並盛高校は一つの話題で持ちきりだった。その話題というのは言い出しっぺに曰く
「あの暴れ者の高山が瀕死体で見つかったんだよ！高山の奴うわごとみてえに右手が…奴の右手が銃に…って繰り返してるらしい！」
と言うことだ。
栄助はその話を聞いて明人達に校舎裏のポプラの木の下に集まってもらった。
他のクラスからも何人か集まってきている。
極限流空手の次期総帥、坂崎カイが自慢のさらりとした金髪を掻き上げ、隣にいる赤毛の少女に声をかけた。
「へえ…その噂は俺も聞いてるが、お前らがそんなことを気にするなんて意外だな。な

あ、八神？」

赤毛の少女はクールにカイを一瞥すると明人に向き直り言う。

「明人、お前は父さん達に関係していると思っているの？」

「ああ、特に俺の親父、草薙京はクローンを量産されている。その中にはあの…なんつったっけか…あー…あの…」

何かを思い出そうとする明人に栄助が助け船を出す。

「Ｋ９９９９…あの…なんかのＳＦマンガの主役みたいな奴だ。２５．６年前のＫＯＦに出ていたクレイジーなバケモノだ。」

コード番号みたいだな。と弘が呟くと吉久が

「とにかく、右手が不気味に動いてる奴がいたらすぐ逃げよう。良いね？」

と締めくくり、それぞれが教室に戻っていった。

・・・・・

レイズ・Ｋはいつも苛立っている。

呑気にしている人間が気に入らない。

この青いグローブがないと言うことを聞かないこの右腕も気に入らない。

世界が、自分が、こんな歪んだ命をこの世に生み出し、一人残して死んでいった両親が。

全てが気に入らない。
「オイ。」
またか。とレイズはうっとうしげに振り向く。後ろにはガラの悪そうな長ラン短ラン様々な改造学ランを着た不良高校生達だ。
「なんだよ、うっとうしい。」
「兄ちゃん、金貸してくれよ。」
どう考えても17．8のそいつらに向けてレイズは言い返す。
「俺は15だ。お前らより年下なのに兄ちゃんなんて言われたくないね、命が惜しけりゃさっさと消えな、オッサン方！」
10人近くの不良共の先頭に立つ奴がピクリとこめかみを振るわせて言う。
「おもしろいな…ちょっといっしょに来てもらおうか。」
そう言う不良について路地裏に入ると同時に不良達の態度が変わる。
「じゃあ、有り金全部置いてってもらうぜ！やっちまえ！」
若干キレ気味に先頭が言うと他が一斉にレイズに飛びかかる。
しかしレイズは表情におびえどころか同様すら見せない。ただ、いつもの苛立ちを浮かべたままだ。
「うぜえ。」

白い髪が少しだけ青みがかる。それに気付かずに飛びかかってくる不良に向かって更に吐き捨てる。

「うぜえっつってんだろ。」

それでも向かって来る。

「だから…」

次の瞬間、レイズの白髪が全て深みのある青色に変わる。そしてレイズが吼えた。

「あっちへ行ってろォォォォッ!」

青いグローブに包まれた右腕が不気味に蠢くと巨大な腕に変化し、襲い来る不良達を一撃で吹き飛ばした。

「ひっ!」

「ば…バケモノ…」

「なんなんだこいつは!」

「うわアアアアッ!もうやってられねエ!総長!俺は先に帰る!」

「バッ!バカ!勝手に逃げるな!」

4人が逃げ出そうとしたのに対して先ほど挑発していた総長が急に慌てだした。しかし、その4人を返す刀で薙ぎ払い、悲鳴すら上げさせずに意識を刈り取る。

「ゆっ!許し…」

「だァれが許すかよ、このゲスが…」
慌てふためいて許しを請う総長―高山―に対してレイズは冷ややかに右腕を向ける。
「テメェも逝っちまえッ！」
右腕が巨大な銃に変化し、銃口から大熱量の何かが吐き出される。
5発、6発！意識を失った高山に背を向けるとレイズは言う。
「命だけは勘弁してやるよ。」
彼の名はレイズ・K。K9999と同じくネスツの改造人間、アンヘルの間に生まれ、生まれたときから右腕に異能を宿した少年だ。
その翌日、高山がレイズにやられた話が並盛高校を駆け巡ることになる。
その惨劇を気配を殺してみていた14才の少年、白銀の髪に茶色のメッシュの入ったカイル・ロランジュは倒れた高山の近くでしゃがみ込み、彼のポケットから携帯電話を取りだして並盛病院に電話してやる。通話が終わると彼はひとりごちる。
「俺の同類か…」
・・・・・
九条栄助は郵便受けに白い封筒が二つ入っているのを見つけた。
一つを見ると父、九条翔と母、九条氷華からの置き手紙だ。
「なになに…？栄助、今日は隣町に新しくスーパーができたらしいからそこに行こうと

お隣に誘われた。ひょっとしたらお前が帰ってくるまでに帰れないかもしれん。封筒に２０００円入れておいたから吉久か誰か誘って食いに行ってこい…分かったよ。」

そう言うともう一つの自分宛の封筒を自室に置いてきて隣の沢田の表札のかかった家に向かい、インターホンを押す。

「綱吉さーん、吉久ー！メシ食いに行こうぜー！」

二人もどうやら夕食に困っていたようですぐに出てきた。

「やあ。栄助君も置いてけぼり？」

「ええ、免許持ってんの親父だけだから。今日はパオパオカフェのシフトも入ってないらしいし。」

談笑しながら知り合いのよしみで安く美味しい寿司の食べられる竹寿司に向かっていると唐突に何者かの銃撃が地面にあたり、土煙を発生させた。

「ウオラァッ！」

「当たるか！そんな大振り！」

銀髪に茶色のメッシュの少年―カイルに青い髪の少年―レイズがえらいことになっている右腕を突き出す。

その腕を見た栄助が驚きの声を上げた。

「あの右手…噂の…！」

「高山先輩をズタボロにしたって言う…」
「噂のバケモノか…」
大通りで暴れ回る二人に通行人が巻き込まれそうになる。
「綱吉さん、通行人の避難を。」
「栄助君は?」
俺の予想が正しければ…前置きしながら栄助が二人の所に近づいていく。
「あの力をとめられるのは俺だけだ。」
そう言うと白いメッシュはそのままに栗色の髪が水色になり、吸い込まれそうな漆黒の瞳が赤くなる。
力を解放した栄助が二人の所へ走り出し、左手を突き出す。その手が伸びている方向にはレイズ。
「止まれ!」
栄助の叫びに併せて空中を氷が走り、レイズの右腕が動かなくなる。
「何イッ!?」
「お前も…!?」
栄助を見て愕然とするカインに反対の右手を突きつけるとそれを勢いよく払い、炎の幕で自分の姿を隠すと素早く位置を変え、回し蹴りの姿勢を取り、そのまま回転する。

「レイスピン！」
靴底にスケート靴のような刃を生み出して斬りつけるとカイルはその臑をしたから突き上げて躱す。
「まだだっ！」
栄助がそのまま突き上げられた勢いを利用して反対の足で顎を蹴り上げた。
「ぐっ！」
素早く後ろに下がったカイルに向けて地面を凍らせながら滑っていく栄助に向けてカインは右手の平を向けて叫んだ。
「待て！俺はお前の敵じゃない！」
突撃をとめた栄助が驚いたように止まる。
「俺はあいつに襲われたから応戦していただけだ。休戦にしたい。ネスツの実験体の二世代目。」
「なんだとォ!?なぜお前がそれを知っている!?」
いきり立つ栄助を遮ってカイルは提案する。
「俺の名はカイル。カイル・ロランジュだ。お前と同じ、ネスツの実験体の息子さ。あいつもな。まあ、飯でも食いながら話をしよう。」
それを飲んだ栄助が無理矢理レイズを連れて行くのを後ろから見ていた綱吉は吉久

に聞いた。
「大丈夫かな、俺の財布…」
　切実な父親の問いに息子は答える。
「俺も出すよ」
　吉久の答えも引き攣っていた。
・・・・・・
「ケイタ、龍太郎、行ってくるでな。」
　緑の拳法着に青いパーカーという出で立ちの男が目の前にいる二人の息子―母親似の紫色をした髪と瞳のケイタと自分に似た茶髪の龍太郎―に声をかけて家から出て行った。外から「待ってえなアテナー」「拳崇が遅いからよっ」という会話が聞こえてくる。
　麻宮ケイタは隣にいる兄にニンマリとした笑顔を見せると白い封筒をヒラヒラさせていった。
「ほな、いこか兄貴。」
「そーだな、包師匠の所に行くか。俺も招待状を持ったし。」
　麻宮兄弟はこうして中国に旅立った。これから多くの人間の運命を動かすその招待状を握りしめて。

主要3チーム紹介

〈新三種の神器チーム〉

草薙明人

草薙京と櫛灘ユキの息子。母親似の少し中性的な顔立ち。

性格は大胆不敵な父親似。才能面でも申し分なく、草薙流の大半の技とテリーの技を見取り稽古だけでほぼ完璧にマスターしている。

アッシュ編で京が着ていたシングルライダースジャケットにネスツ編京のインナー、草薙グローブにテリーのキャップ（ＦＡＴＡＬ　ＦＵＲＹ）という出で立ち。

格闘スタイル：草薙流古武術＋マーシャルアーツ

好きな食べ物：ちりめんじゃこ

嫌いなもの：うっとーしーもの、努力

大切なもの：居候、テリーさんからもらったキャップ

八神夕子

八神庵と谷間菊理の娘。赤毛を短く切りそろえて右側に垂らしている完璧な父親似。

性格は庵に比べると大人しく、また、オロチの血も薄いため、暴走の危険性はほとん

どない。
　というか庵の血の濃さが異常。八神流にも独自のアレンジを加えており、主に斬撃を打撃に変えるなどの違いが見られる。
　庵が行方知れずの状況下において菊理が病死、ちづるを頼った結果、紆余曲折の末に草薙家に居候することになる。
　居候するまでの間、自分はバケモノだから不幸がよってくるんだと思っていた。
　その後居候することになる直前の明人との戦い以来明人に思いを寄せている。
　並盛高校吹奏楽部に所属しており、明人の隣のクラス。
　爪庵そのままの服装であり、曰く「ドレスシャツじゃ裾が長くて動きづらい」らしい。
　格闘スタイル：自己流八神流古武術
　好きな食べ物：あっさりしたもの
　嫌いなもの：脂っこいもの、オロチの血
　大切なもの：８歳の時に明人が言った言葉、自分用のサックス
二階堂優作
　二階堂紅丸と神楽ちづるの息子で後頭部が母親似の長髪、前髪が父親似の散り方という両親の髪型を足したような感じ。
　男でありながら鏡の力を有しているため、三つ下の双子の妹、ユカとケイが成長する

までの期限付きで神器の代行をつとめている。
また、紅丸の帯電体質も引き継いでおり、幻影が帯電した状態で突っ込んできたり幻影ハリケーンの幻影の数が二倍になっていたりとひじょうにうっざったい。
性格は超がつくほどのナルシスト。しかしそれに見合うだけの実力はあり、明人の親友兼ライバルである。
生まれも育ちも大阪人なのに関西弁を喋らず芝居がかった口調で話すので明人にはキザな奴にだけ通じるキザ語スピーカーなどと皮肉られている。
チームの中で一人だけ大阪の高校に通っている。
２００３の紅丸の衣装にロングコートを合わせたような服装。
格闘スタイル：シューティング＋神楽流古武術
好きな食べ物：中トロ
嫌いなもの：美しくないもの、オッサン
大切なもの：美しい俺！

〈あさり一家〉

沢田吉久
沢田綱吉と笹川京子の息子。母親似のちょっと癖のついた茶髪を顎のあたりで切りそろえている。

ボンゴレの次期ボスとして日夜リボーンにしごかれる毎日を送っているが成績は並み程度。
性格は天然気味の穏和な性格、ときどき黒いことも言う。初対面で友人から話を聞いただけの人間に夕飯驕らせようとするとか割とセコイ。
ちなみに右腕から好意を抱かれてもそれに気付かないとんでもない鈍感男。
炎の属性は大空で特殊なドライビンググローブに炎を灯す。
服装は白地に青でチェックの入った半袖シャツを黒い長袖の上からはおり黒無地のネクタイを緩く締めたツナの数ある服装の一つ。
格闘スタイル：死ぬ気
好きな食べ物：ハンバーグ
嫌いなもの：しごき
大切なもの：自警団としてのボンゴレ、友人

獄寺弘
獄寺隼人と三浦ハルの娘。銀髪をポニーテールにまとめている目つきの険しい少女。
吉久を公私問わずにサポートするいわば右腕のような存在で絶賛片思い中、しかし吉久の半端ない鈍感さのせいで成就する確率は日本の小さな村に宇宙人がやってきて仲良く酒を飲んで鍋を突くぐらいのとんでもない低確率。

炎の属性は嵐で多種多様なダイナマイトを操り戦う。このへん隼人からこっそりと教わっており、ばれた時は隼人がハルに怒られたという話。
服装は白いジャケットの下に赤いドレスシャツというもの。
格闘スタイル：爆破による中距離封鎖戦
好きな食べ物：好き嫌いはナシ。何でも食べる
嫌いなもの：特に関わりのない年上、若大将をバカにする奴
大切なもの：右腕のポジション、若大将

山本宏人
山本武の息子。母親は出て来ないし特に誰とも設定されていない。外見も中学生のときの武そのもの。
しかしチームあさり一家は全員高校一年生なので正直言って幼い。
性格はあっけらかんとした純正天然男。もしくは超絶無責任男。一応責任感はあるらしいが恐ろしいほどにそれが見えない。
炎の属性は雨で自分で木を削って作った木刀で戦う。
服装はTシャツの上からアーミーグリーンのジャケット。
格闘スタイル：親父のくれた時雨蒼燕流
好きな食べ物：親父の握った寿司（特に鮭）

嫌いなもの：インスタント食品
大切なもの：ダチ

〈月華の剣士チーム〉

蒼月楓

月華の楓。慨世の養子として育てられた楓。青龍の守護者楓。覚醒するとロックになる楓。どこからどう見ても楓。

何故彼が現代にいるのかというとある科学者が落とした１０年バズーカの試作品、未来弾をうっかり踏んづけてタイムトラベルしてしまった。

しかも厄介なことに効力は切れることがなく、歴史もはっきりと「楓が神隠しにあった」とされてしまっているので過去に帰ることが出来ず、現代に居着くことになる。

２５歳の高校教師としてボンゴレに偽造された身分で生活しているが自分自身もう仕方ないなと思っているため特に問題はないらしい。

服装は就職するときに洋服の〇山で調達した上下そろいで１００００円ほどの黒背広。

覚醒、非覚醒共に二枚目であるためとても幕末の人間とは思えないほどにマッチしている。

過去では二度の地獄門騒動の後あかりと行く当てもなく旅をしていたらしい。

格闘スタイル：活心一刀流＋活殺逸刀流
好きな食べ物：水ようかん
嫌いなもの：幽霊（怖いんじゃないよ。めんどくさいだけ）／まどろっこしいこと
大切なもの：疾風丸、あかり／あかり
一条あかり
月華のあかり。楓を追いかけてこっそり科学者から未来弾を盗み出して現代にやってきた。
２０歳。現代に来て間もないため今のところは無職。
ＮＢＣの要素も取り入れているためＭｒ．カラテやら望月双角の雷神やらをよびだす。というか今作で一番多く出てくる式神は雷神。無惨弾がやりたかったからこうした。後悔はしていない
服装は自分で選んできた赤いワンポイントの入った白いシャツにミニスカート。それに黄色でカエデのマークを入れた黒のジャケット。ちなみにこれを買う金は楓の初任給から出ている。
格闘スタイル：一条流陰陽術
好きな食べ物：まんじゅう、熱いお茶
嫌いなもの：古くさい考え方

大切なもの：楓

山本武

特に説明のしようのないボンゴレ雨の守護者。さすがに全員幕末でそろえるとバランスが悪いので現代人で一番戦い方の似ている実力者を加入させた。

格闘スタイル：時雨蒼燕流

好きな食べ物：寿司

嫌いなもの：ダチをバカにするようなこと、まどろっこしい数式

大切なもの：ダチ、時雨金時

ＲＯＵＮＤ２　招待状、来る！

並盛商店街にあるまあそこそこ繁盛している飲食店。
カポエリストのソワレ・メイラの経営するパオパオカフェ四号店だ。
そこに二人の日本人と一人のアメリカ人が陣取っている鋭い空気を纏ったテーブルが１つ。
草薙京、リョウ・サカザキ、テリー・ボガードの座るテーブルは当然注目の的だ。世界でも指折りの格闘家が三人揃って何を話しているのか…他の客達は自分たちで話しながらも耳を傾けている。
で?とリョウが京に話を振った。
「わざわざサウスタウンから日本に呼びつけた理由、きかせてくれないか?」
「理由は、これさ。」
そういって京が取り出したのは栄助宛に届いていたのと同じ白い封筒。
「見りゃわかると思うが、ＫＯＦの招待状だ。神楽のヤツに出てほしいって頼まれたんだがな。」
と、頭を振りながら続ける。

「調査目的で参加するにしたってメンバーが必要だが紅丸は二階堂グループの仕事が忙しくて動けないしゴローちゃんは去年格闘技から引退した。真吾も仕事が忙しい。パオパオカフェのステージファイターの仕事はどうぞこうぞやりくりできるがそれにしたって一人じゃ出られない。そこでだ。」
「俺達の力を借りたい…ってか?」
　リョウがそう返すとテリーも続けて
「OK!どのみちマリーに調査を頼まれてたんだ。ちょうど良いぜ!」
「俺は…どうするかな…すまん、ちょっと席を外す。」
　そういってリョウが席を立つ。その間、テリーの技を少しだけ盗み取っていった明人の実力について話をする。ちなみに、明人の被っている赤いキャップはかつてテリーが被っていたFATAL　FURYの文字の入ったものだ。
「うちのバカ息子なら大丈夫さ、お前の技も草薙流も、完璧に覚えてるぜ。」
　もっとも、と区切ると京は意地の悪い笑みで
「俺ほどじゃねえがな。無式使えねえし。」
「ハハハ、手厳しいな!」
　そうこうしているうちにリョウが戻ってきた。
「キングからOKが出た。チームキングオブファイターズの結成だな。」

それを聞いたテリー合点し、ちょうど今テーブルの間を縫うように歩いているソワレに向けて声を張る。

「ＡＬＬ　ＲＩＧＨＴ!そうときまりゃあ景気づけに、ソワレ!ステージ貸してくれ!」

「おもしれえ、総当たり戦だ!」

「最終調整と行くか!」

三人の言葉を聞くとソワレがステージに立つ。

「いいねえ!お客様がた!サウスタウンヒーローとＭｒ．カラテ、炎の貴公子の激レアバトルだ!楽しんでください!」

場を盛り上げるように京とテリーが綺麗な前方宙返りをキメながらステージに着地する。

「わあああああああああああ!」

客達の歓声の中、テリーが間合いを詰めつつ攻撃するためにバーンナックルを繰り出した。

京はそれを鵺摘みの肘打ちで返す。

「ＨＥＹ、京!それが４０代のパワーか?」

「そりゃこっちの台詞だぜ、４０代後半!」

・・・・・・

同じ頃、明人ははるばる大阪からやってきた親友と自宅の玄関先で話していた。母、菊理が病死したうえに父である庵がいつも消息不明のため草薙家に居候している夕子も明人の隣にいる。

「ホントに久しぶりだな、優作。全く訛ってない大阪人め。」

「そりゃな、親父もお袋も標準語だし、社内公用語も標準語なんだ。」

「二階堂グループだからなあ。」

二階堂紅丸と二階堂―旧姓神楽ちづるを親に持つ超天才シューターの二階堂優作は生まれも育ちも大阪の癖して全く関西弁を喋らないその気障ったらしい口調で夕子にも挨拶する。

「八神さんも、お久しぶり。どう?今度一緒に食事でも?」

「いや。ホントに紅丸さんそっくりね。ユカとケイに怒られないの?女たらし。」

手厳しいね。と苦笑いする優作は三つ下の双子の妹たちに比べ、神器の力こそ弱い物の鏡の力を持っており、幻影とシューティングの複合技で高い実力を誇る、明人の親友だ。

「さて、無駄話はこれくらいにして、お前ら、これは受け取ったか?」

「ああ、俺も夕子も受け取った。後、親父も受け取ってる。その件で今は不在なんだ。」

二人の手元にあるのは白い封筒だ。中には一枚の便せんとアメリカ、ストリートファ

イトが世界一盛んな街、サウスタウンへ向かう為の飛行機と列車のチケットだ。
「２０３２年、キング・オブ・ファイターズを開催。対戦形式は3対3のチーム戦とする…インフェルノファミリー。か。」
優作が便せんに書かれた文面を読み上げる。
「インフェルノファミリー何てサンズオブフェイトからもバーンシュタイン商会からも、ボンゴレやハイデルン傭兵部隊でさえ知らない組織だ…」
ハッ。と優作の懸念を明人は一笑に付す。
「俺はそんなこと関係ないね。もっと強くなる。お袋を、この街を、こいつを守り通せるくらい強くなる。その修行になりそうだからな。参加してやるよ。」
ってもまあ。とバツの悪そうな口調で続けて
「まだ無式も使えねえがな。その分はマーシャルアーツでカバーするさ。夕子、お前はどうする?」
鮮やかな赤毛の彼女はその質問に
「私も、この血に負けないくらい強くなりたい。だから参加するわ。オロチの力をはじき返せるくらいに強くね。止めてもきかないわよ。」
二人の意気込みをきき、優作が笑って言う。
「よし、チームは決まったな。新三種の神器チーム、結成だ!」

さあ頑張ろうぜ！と言おうとしたところで明人と夕子の後ろで草薙家の玄関が空き、明人の母である草薙ユキが顔を出した。
「三人とも、晩ご飯できたわよ！」
「「はーい！」」
さっきまでの真面目な表情も何処へやら。あっという間にただの高校生の顔になって優作と夕子が家の中に消えていく。
明人がん？と言う顔をしてユキに質問した。
「なあ、親父は？まだ帰ってきてねえじゃん。」
「テリーさんとリョウさんと一緒に食べてくるって。」
「あンのクソ親父…強力通り越してもはや凶悪じゃねエか。庵さんしか勝てねえよ。オイ。ま、いいや。ってあああ！待てよ二人とも！まだ俺もお袋もそっち行ってねえじゃねエか！」
どちらかと言えば京よりユキに似た明人がその中性的な顔に思いっきり焦りの色を浮かべて家の中に猛ダッシュで駆け込んでいった。
「全く、うちのバカ息子は…まあ良いわ。三人とも！！私が行くまで食べちゃ駄目よー！」
・・・・・・

大門虎五郎は今どき珍しい超のつくほどの堅物で、その上修行バカだ。父、大門五郎からの教育により、生後9ヶ月にして回転受け身をマスターした男で、同じ企業に勤めている連中からは「柔道部の悪夢」だとか「柔道界の魔王」とか、「生まれながらの柔道家」などと言われている。

しかし、年齢による上下関係を嫌う彼は比較的親しみやすいのだ。

25才である虎五郎は15才の坂崎カイと14才の矢吹圭太郎―彼は矢吹真吾の息子であり、草薙明人の一番弟子（自称）である―と、対等な口をきかれていても悪いかお一つしていない。

「で、虎五郎さんと俺を呼んだのはどういう理由なんッスか?坂崎先輩。」

「ああ、虎ちゃんも圭太郎ももらったろ?KOFの招待状。」

「うむ。」

「ええ、ですけど、それがどうかしましたか?」

「ここに三人集めて、みんな招待状を持ってるって事は…どういう事か分かれよお前ら。」

そこで虎五郎がぽんと手を打ち、

「そうか!チームか!」

と言い、そこにいたって圭太郎もやっと

「ああ、なるほど！俺達三人でチームを組んでＫＯＦに出るんですね！」
「そゆこと。俺の極限流空手もまだまだ師範代になることすらできない実力だからな。圭太郎だってまだ明人に近付いていないだろ？」
「ハイ！恥ずかしい話まだ炎が出せないんです。」
　ちなみに、真吾もかつてアナザーストライカーとしてＫＯＦに飛び入り参加していた京子も草薙家の血縁ではないため、圭太郎に草薙の炎を出すことはできない。
「まあ、親父もＫＯＦで実力を磨いていったというしな。よし。私も出場しよう。」
「おし、そうときまれば新日本チーム、景気づけに飯でも食いに行こうぜ！」
・・・・・
「と言うわけで、今回はＣＥＤＥＦ機関、バーンシュタイン商会と協力して事に当たる、各員準備に入るように。オペレーターは００：３２には機器の整備を完了させる。」
　軍服姿の青い髪をした端整な顔立ちの女性が基地のブリーフィングルームで指示を出す。
「司令、怒チームのメンバーはいかがいたしますか？」
　司令と呼ばれた女性、かつてこの基地で最高指揮官を務めていた隻眼の傭兵、ハイデルンの義理の娘であるレオナ・ハイデルンが問いを発した大佐に答える。
「ＣＥＤＥＦからは藤堂、バーンシュタイン商会からはネロ・バーンシュタインが出向し

てくれている。あとは、私達の中から選りすぐりの隊員を集めるのよ。その中から私が選定する。」

「ハッ！了解しました！」

ラルフやクラークも退役し、ウィップも「指揮官なんてガラじゃありません」と言ったために司令官に就任した彼女は果たして誰が良いだろうかと考えながら二人の助っ人のいる部屋へ向かう。

扉が開くと真っ先に立ち上がり、黒髪をアシンメトリーに整えた少年が一礼した。

「レオナ殿、そちらはどうなりました？」

そうきく少年の名は藤堂カズヤ。藤堂死炎流武術を操るＣＥＤＥＦの次期最高責任者、ボンゴレ門外顧問に最も近いとされている人物で、藤堂香澄とバジルを親に持っている。母の藤堂流武術と父の死ぬ気のコントロール技術をミックスした結果完成した藤堂死炎流は彼曰くかなり実戦向きなんだそうだ。

部屋にいるもう一人の青年はどこか気品を漂わせる整った顔立ちで、色の良い金髪をほどよい長さで切り、前髪をセンター分けにした２０代前半の頃の父、アーデルハイドにそっくりな青年、次期バーンシュタイン家当主にしてバーンシュタイン商会の重鎮、あらゆる格闘技をマスターした総合格闘術の使い手であるネロ・バーンシュタインだ。

読んでいたペイパーバックから顔を上げ、ネロは

「別に良いだろ、誰がチームメイトでも。」
　とカズヤのほうに目をやって言う。
「しかし…」
「誰と組もうが自分に出せるだけの力を出せよ。違うか？」
　このあたり、アーデルハイドの血を色濃く受け継いでいるが正直祖父のルガール・バーンシュタインの血はほとんど表面化していないことが伺える。
　口は悪いが紳士なのだ。
　と、更に扉がばんっ！と開かれ、入ってきたのは一人の兵士。軍人と言うよりスポーツ選手といった感じの兵士はきっちりとした敬礼を取り、名乗る。
「ツァイス・ヴィオレント少佐、ただいま着任いたしました！」
「貴官の戦い方は？」
「ハッ！ハイデルン流暗殺術とマーシャルアーツであります！」
「（まるで大佐ね…）では、ツァイス少佐、藤堂カズヤ君、ネロ・バーンシュタイン君の三名で怒チームを結成、ＫＯＦへ潜入してもらいます。我々はあなたたちの反応をトレースしながら大会を外から監視します。」
　どれだけの時が過ぎようともハイデルン傭兵部隊と怒チームの立ち位置は変わらない。ＫＯＦの裏に潜む陰謀を暴き出すため、彼等は再び動き出した。

・・・・・・

「へえ、じゃあ、吉久と宏人君と弘さんでＫＯＦに出るんだ?」

沢田京子。ボンゴレ十代目沢田綱吉の妻であり、しかし一般人でもある彼女は白い封筒を携えた吉久に問うた。

「ああ、リボーンさんから言われちゃって…修行の一環と称してる上に負けたらねっちょりコースだ・・・ってさ。」

仕立ての良い黒スーツを着た赤ん坊に高校生がおびえる姿を想像すると少しおかしい気もするがリボーンはマフィア界最強の赤ん坊、虹の赤ん坊（アルコバレーノ）。

やると言ったら本当にしつこく、陰湿に、しかし悔しいことに効果がある方法で教え子に試練を課すのだ。

時に不良を挑発しておいて自分だけさっさと帰ったり、渦巻く渦潮の中にたたき込んだりと、とにかくはちゃめちゃなのではあるが、かつてダメツナと呼ばれた綱吉をマフィアボンゴレのボスにふさわしい人物に育て上げたあたりやはり有能なのだ。

「でも偶然ね、お隣の栄助くんも出場するんだって。」

「あいつが!?まあ、勝てなくても最後まで食らいつくことにするよ。」

・・・・・・

「なあ、親父、テリーさんも出場するっていう話だけどどうするんだよ?出ねえのか?」

とある会社の社長室で鮮やかな金の髪の青年が同じ色の髪の男にことばを投げかけた。
「本音は?」
「俺が出たい。」
「だろうな。出ねえよ、仕事が忙しいんだ。出るならレイン、お前だけで出やがれ。」
「へっ!ロック・ハワードともあろうお方がその様子じゃ世代交代も近いかな?」
かつて餓狼と謳われたテリー・ボガードの義子、ロック・ハワードに息子のレイン・ハワードが不遜なことばをぶつける。
チームメイトの当てがないのでいらだっているらしい。しかしそんな棘のあることばもどこ吹く風。ロックは冷静に返す。
「バカいってんじゃねエよ。三代目の虎に連絡とってやるからあと一人は自分で見つけな。」
「へーへー、分かりやしたよ。あとでびっくりして吠え面かいてもしらねえからな。」
「分かった分かった。いいから行ってこい。」
つかつかと上質な革靴の足音を響かせ、茶色いジャケットを翻し、ハワードコネクションの社長執務室を辞去していくレインを見送ったあと、ロックはおもむろに内線電話を手に取った。

「ああ、俺だ。…と…と…と、あと…、これだけの事業計画を延期しようと思う。あと、それで○○から××にかけての期間に空きスケジュールができるわけだが、その間俺が何をしていようが口出し無用だ！じゃあそういうことで、よろしくな。」

『ああッ、ちょっ!?社長!?どう言うことですか!?社ちょっ…』

受話器を置くと少しだけ肩をすくめてロックは苦笑する。

「やれやれ、俺もまだまだ若いな、さてと…」

といって今度は携帯電話を手に取り、

「もしもし、ジェイフン？折り入って頼みがあるんだけど…」

それをこっそり盗み聞きしていたレインは廊下で苦笑している。

「やっぱそういうことかよ、わーったよ。俺は俺で格闘家仲間連れて出場してやるよ。」

今度は音も立てずにレインは廊下を歩いて行った。

ちなみに、ロックはそれから大会一週間前まで不眠不休で仕事をした末に漸く大会期間中の休みを手に入れたそうな。

ＲＯＵＮＤ３　チーム揃う

楓がＫＯＦの招待状を見ながら考え込んでいる。
「この時代に僕の人脈はないし…チームメイト、どうしようか…」
並盛商店街で夕食の買い物をしながらいつもスーツのポケットにしまってある招待状を見てチームメイトについて悩むのが最近の日課になりつつある楓。
そんな悩みを抱えた楓の耳が騒ぎを聞きつけ、ふとそちらに目をやるとそこには鬼の顔に似たなにか、大きい妖怪、蛇に似た鬼が巻きついた釣鐘、渋い忍者に似たなにか…等々、どこかで見たような怪物達がそこら一体をうようよしていた。
「ええッ!?」
（オイオイ、あいつもタイムトラベルしてきたのかよ…）
「言ってる場合!?厄介ごとになる前に止めないと！」
と、招待状と買い物袋しまうとそのディパックをしっかりと背負い、怪物達のまっただ中へと突撃していった。
・・・・・
「じゃあ、楓はもう戻ってこれへんの!?」

水干を改造したような服装の少女がそう詰め寄った相手はイタリア人科学者。
「しょうがないじゃないですか！行く方法しか設定してない試作品ですもん！」
「なんでそないなモンを楓にくらわせたんや!?」
「別に喰らわせるつもりはありませんでしたよ！落っことしちゃった試作品を楓さんが踏んづけただけです！」
少女が科学者のいる部屋から退室し、研究所から出ると「お嬢、どうでした?」と大男が声をかけてきた。
「あかんわ。どうにもならへん…」
「とにかく、今日は休みましょう。もう遅いですから。」
そして大男が宿へ向けて歩いて行くと少女は少しだけ謝罪するように顔をうつむけ、そしてすぐに楓が未来へとばされた元凶となったそれを思い切り自分の足下へ叩き付けた。
（まっとってや…楓！）
時は１８７１年のことである。
・・・・・・
「アカンなあ…ここがどこかわからへんし、式神出しても驚かれるだけやし…」
楓を追って現代にやってきた陰陽師の少女、一条あかりが頭を抱えてあどうしよう

と困っていると大量の式神を押しのけてやってくる一人の青年が見えた。
「あっれぇー…あの人どっかで見たことあるような気がするけど…どこやったかなあ…」
　青年は黒い洋服を着ていて、藍色の髪を頭頂部あたりで一つにまとめている。と、その青年が思いきり息を荒げながら
「ゼエ、ゼエ、あっ！あかりさん！なんでこの時代にいるんですか!?」
「なにゆうてんねん！楓追っかけて来たんやないか！」
　じゃなくてっ！と楓は膝に両手をついて荒い息をつきながら
「どうやってこの時代に来たのか聞いてるんですよ！って言うかとりあえずこの式神しまって下さい。騒ぎになってるんで。」
「はいはい、ほな、みんな戻ってや～。えっとなあ、たいむましん？っちゅーのの試作品を使ったんやけど、ご免。」
　は？一瞬半眼になった楓にあかりがぺろりと舌を出しながら一礼。
「ウチも帰れんくなってもうた。」
「そう来ると思った。」
　・・・・・・
「アイ！ちゃんと３人目、探しとるんやろな!?」

茶髪に金のメッシュの入った少年、政府高官が個人的に雇っているエージェントの一人であるユウキが青と白の帽子がトレードマークの相棒、アイに向かって携帯端末を操作しながら聞く。しかしそれに対する答えはというと。

「訛ってるよ、広島人。」

「んなっ!?なまっとりゃーせんが!」

「だから訛ってるってば。それに心当たりないし。」

それを聞いてとたんにユウキはただでさえ苛ついていたのだが完全にブチギレた。

「もーしりゃーせん!かってにしーや!」

「ちょっ!?何処行くのよ!?」

ほっとけ!と言ってユウキがどこかへ行くとアイは密かに後をつけた。

「怒ったユウキは何するか分かんないもんね…」

その様子は相棒と言うよりも姉弟といったほうが近いかもしれない。

・・・・・

「あーもー!ほんとにいやになるよこんちくしょー!」

パオパオカフェ並盛支店で酔っぱらって管を巻いているのはチームメンバーを探すのが面倒になってほっぽり出してきたユウキだ。

ちなみに、こいつは17才の日本人。れっきとした未成年だ。

　カウンターに陣取ってベロンベロンに酔いつぶれたユウキがろれつの回らない日本語で愚痴っているのをきいたソワレは少し心配になって声をかけてみた。
「お客さん、大丈夫かよ?何言ってるのかわかりゃしねえぞ?」
「あ〜?なまっとりゃーせんってゆーとろーが!」
「訛りじゃねエよ!ッつーか今度こそしっかり訛ってるじゃねエか!」
　しかしそんなソワレの言葉も一切耳を貸さずにユウキがふらふらと立ち上がってファイティングポーズをとった。
「だーから…」
「お客さん!?」
「なまっとりゃーせんがー!超ド級ネオジオ乱舞じゃあああああ!」
「あぶねッ!ダブルウェンズデー!」
　・・・・・
「ユウキ…ど〜こ行ったのかなあ?」
　アイがユウキを見失った並盛商店街の入り口当たりをぶらついていると一軒の店からすごい音と一緒にユウキが吹っ飛んだ。
「ユウキ!?ちょっ!どーしたのよ?」
「うるへー!なまっとりゃせんゆーにあの店長が何回も何回もなまっとるゆーからや

！」

「駄目だこりゃ、完璧に酔っぱらってる。すーっ…」

ユウキの耳元でアイは思いっきり息を吸い込み、

「起きろバカユウキーー！」

と、思いきり怒鳴った。耳元での大音声に酔いが醒めたらしく、「あてててて…ありゃ？」等と言いながらユウキは周囲を見回すと顎を押さえて

「イタタタタタ！なんなんだよあの店長は！なんで飲み屋の店長がこんなに強いんだよ!?」

と、その辺を転げ回った。

「お客さん、お代は？シメて…？な。」

「高え！ってそんな事言ってる場合じゃねえ！店長！」

追いかけて飲んだ分の代金を請求しに来たソワレに対し、ユウキが叫ぶように声をかけた。

「な？なんだよ？」

「頼む！俺らと一緒にＫＯＦに出場してくれ！」

「なあ!?」

・・・・・・

並盛３丁目にある川平不動産に一人の青年が入っていく。
ラーメンをすすっていた和服姿の男が店の入り口に目をやる。
「ずるずる…あ、楓くん、いらっしゃい。」
「川平さん、お願いがあってきました。」
四十代も半ばにさしかかったにもかかわらず２０代前半、下手をすれば１０代にも見えるこの不動産屋の主、
川平は目を丸くする。
「おや？たしか自分は一人者だからワンルームマンションでいいとか言ってなかったっけ？」
「ええ、のはずだったんですが、もとの時代から知人が僕を追いかけてきまして。」
「で、二人じゃ狭いからと。ふむふむ、なるほど…」
と、取り扱っている物件の資料をぱらぱらとめくりながら、おもむろに顔を上げて
「ところで、楓くん、その人、彼女？」
「な!?」
川平の邪推に楓が茹で蛸よりも真っ赤になって慌てるのを見て、
「ははは…若い若い…ハイ、これが新しい家の鍵ね。お金はあとで綱吉君達に請求しとくから心配しなくて良いよ。」

・・・・・・

「と、いうわけで。新しい家にやってきたわけですが…」

何処にあるかもわからないカメラ目線で楓がいう。

「問題はあかりさんだ…改造水干じゃ悪目立ちしすぎる、どうしましょう?」

「せやなあ、このままやと外歩かれへんし、外出せんだらええっちゅう問題やないし…」

二人して新居の居間で顔をつきあわせて話し合っている。

「あ、せや。楓、寺子屋で先生しとるんやって?」

「高校ですよ。で、それが何か?」

「やったら生徒のお母ちゃんにちょっとだけ服貸してもろて、で、自分の服買いに行ったらええんやないか?」

「ああ、そうですね。その手がありましたか!もしもし?沢田さんのお宅ですか?ああ、綱吉さん。実はお願いが…」

・・・・・・

「と、いうわけで。しばらく俺はいなくなるが客足は増えるだろう。良いか?ちゃんと店番してろよ!」

はい、店長!と言う返事を満足そうに聞いていたソワレは後ろにいるユウキとアイに向き直り、

「じゃ、いくか。」
　と声をかける。
「なんか、ごめんなさい…」
　どこか気弱に謝るアイとそれを見て少しだけ顔を曇らせるユウキ。そんな二人を元気づけようとソワレは自前の陽気さで
「なーに言ってんだよ！俺も招待状もらってんだ！メンバー探ししなくていい分楽だったって！前向いていこうぜ、リーダー！」
　と、ユウキの肩をばしばし叩く。
「へ？リーダー、俺？」
「ったりめえじゃねえか！俺はあくまでゲストだし、ユウキの方がアイよりしっかりしてんじゃねえか！」
「そうそう、行きましょ？リーダー。」
　二人からいわれてユウキはがっくり肩を落とす。
「わかったよ、もうリーダーで良いよ…せやな、そりゃこがなことにもなるわな。」
　等とブツクサ言うユウキにアイが一言。
「訛ってるよ。」
「なまっとりゃーせんが！」

・・・・・・

「どや？楓？におとる？」

そういって楓に自分の洋服姿を見せびらかすあかり。

そんな彼女から赤くなって視線をそらし、

「あ、ええ。にっ、似合ってますよ。」

と、どぎまぎしながら返す様子を偶然別の用件で呼び出されていた山本武が笑って見ている。

「ところでこの人も剣士みたいやけど、なんぞ事かあったん？」

一頻り自分が沢田京子から服をかり、楓の所持金で買ってきた赤いワンポイントの入った白いシャツにミニスカートという姿を見せびらかしたあかりが武を示して言う。

「あかりさん、その前に一つ聞きますが、あかりさん、武器だろうが式神だろうが使える格闘大会があったら、出ます？」

「楓次第やな、もし仮にそれが団体戦で、楓がでるんやったらうち、迷わずでるで？でも、いきなりなんや？」

そういったあかりに武が

「ほら、こういう事だぜ。」

と言って白い封筒を手渡す。

「これは？」
「まさにさっき僕が言ったチーム戦形式の格闘大会…」
　そういって私服のポケットから楓は全く同じ封筒を取り出す。
「ｔｈｅ　Ｋｉｎｇ　Ｏｆ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓの招待状です。」
「ホントは俺のダチに届いた奴なんだけどな。そいつが出ねえって言うからその分と、あと楓と俺には最初から届いてたな。」
　つまりこういうこと？とあかりが念を押す。
「うちら三人組でその大会、きんぐおぶふぁいたーずっちゅーのに出るっちゅうわけや。」
「そういうことですね。大会はあと…後、アメリカのセカンドサウスというところで開かれるそうです。ですからまあ、あと一週間はこちらでのんびりできますね。」
「それじゃ俺はツナに伝えてくるぜ。彼女と仲良くな。」
　去り際に武が言い置いていった単語に楓が股真っ赤になっていると
「ほなさっそくでーとっちゅーのに出かけよやないの？」
「んがっ！」
　赤面症の楓はそれすら通り越して意識を手放してしまい、楓!?と言うあかりのあたふたした声が居間に響いた。

ＲＯＵＮＤ４　ＫＯＦ、再び

「明人～！」
新三種の神器チームの旅立ちの日、草薙家に夕子の声が響き渡った。どうやら明人がまだ寝ているようだ。
ベッドの横で思い切り名前を呼ばれても全くの無反応。夕子はしばらく思案した後腰を落とし、ファイティングポーズをとる。
「起きろ、屑風！」
寝ている明人の胸倉を掴み上げ、一気に後ろに放り投げた。
「ぎゃふっ！」
数時間後…
「あっ！朝っぱらから屑風なんてかけんなよ！」
「起きない明人が悪いんでしょ？」
と、空港でも口論している二人に
「テメーら自分の荷物ぐらい自分で持て！」
優作（にもつもち）が怒声を叩き付けた。

「さあ、いこうぜ！」
　さわやかに明人が優作を無視して言う。
「いや人の話を聞け！」
・・・・・・
　ＫＯＦの会場にあるセカンドサウス市街でレイズが「チームＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳ」のメンバーに叫んだ。
「なあ、この右手の凍結封印解いてくれよ！」
　それに対して栄助とカイルは同時に
「やだ。」
　と返した。
　あああああんまりだあああああ！というレイズの叫び声がセカンドサウスにこだまする…
・・・・・・
「崇秀、オレ達チームメイト間違えたか？」
「いえ、実力という面では間違ってないと思いますよ。ただ、人格的には…」
　八神庵を横目で見ながら秦崇秀と秦崇雷はぶつくさ呟いている。主にその原因は全く二人と打ち解けようとしない庵にあるわけだが当の本人は全く悪びれずに京を探し

ている。

「あの、八神さん？勝ち進めばそのうち草薙さんともぶつかるわけですから、どうか落ち着いてくれませんか？」

「崇秀の言うとおりだ、警察沙汰起こされちゃオレ達がいい迷惑なんだよ。」

秦兄弟の諫める声にも耳を貸さず、庵は相変わらずのゴーイングマイウェイ。

「老師さえ生きてりゃなあ…」

「兄さん、タン老師、死んでません。」

「うるせえ！いっ！引退したから格闘家としては死んでるって言いてエんだよ！」

「ハイハイ、そういうことにしておきますよ。」

・・・・・

ＫＯＦの開催が告知される一週間程前。

セカンドサウスにそびえる一つのビル、その最上階に仮面を被った男が倒れ伏した。

「アベル！貴様あっ！」

金の長髪を無造作に流した男が仮面の男―アベルを殺した青年を射殺すような目で睨み付ける。

「そこでジッとしていろ、カイン・Ｒ・ハインライン。貴様の相手は俺ではない、違うか？」

顔の右半分を銀髪で隠したその青年がアベルの血でぬれた黒い日本刀を一降りして、刃についた血をおとす。

アシンメトリーの銀髪に彩られた端整な顔立ちだが、その顔を斜めに引き攣れたような傷跡が横切っている。

しかし事実、カインの相手は彼ではない。カインの目の前に立つ黒衣の男がその縫い合わされた傷を持つ顔でこちらを睨み付けているのだ。

「く…うおおおおおおおおおおおおッッッ!」

紫色の炎のような闘気を全身から吹き出させ、カインが男に迫る。

ガツッ!と言う鈍い音がしてカインの拳が男にめり込む。続いて右、左とラッシュをかけていくカイン。

ガガガガガッ!突きや蹴りが乱舞して男の体を大きく弾き飛ばした瞬間、カインは自分の体に異変を感じた。

(何かが…絡みついている…?)「ッ!これは鎖!?貴様!」

男の手から伸びた鎖がカインの体を縛り上げているのだ。

「クソッ!何故だ!?何故ほどけない!?」

「怒りに身を焼かれ、冷静さを欠いたのが貴様の敗因だ…死ね。必殺技天地来蛇殺(ひっさつぎヘルヘブンスネーキル)。」

カインの体を縛る鎖がきつくなり、そのまま投げ上げられ…

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！」

・・・・

カラフルなモヒカンヘアーの司会、ダック・キングが声を張り上げる。

「レディース、アンドジェントルメン、ボーイズアンドガールズ！坊ちゃん、＆、オネーチャン！これより、ＫＯＦを始めるぜー！」

イエエエエエエエエエエエエエエエエエ！

「オーケイ！それじゃあ先ずは出場チームの紹介だ！先ずはコイツら！」

そういってダックが示したオーロラビジョンに浮かび上がる特大フォントの文字。

「チーム、ｔｈｅ　Ｋｉｎｇ　Ｏｆ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓ！草薙京、テリー・ボガード、リョウ・サカザキと大会屈指の実力者揃いだぜ！次はコイツら！説明不要の噛ませ犬、ヘビィ・Ｄ！、ラッキー・グローバー、ブライアン・バトラーのアメリカンスポーツチーム！続いて紹介するのは庵チーム！八神庵に加えて隠れた実力者、秦崇雷、秦崇秀と言うこれまた凄まじい強さのチーム！」

ステージでは京と庵がにらみ合い、庵を崇雷と崇秀が羽交い締めにしている。

「続いて月華の剣士チーム！活心一刀流の蒼月楓、陰陽師一条あかり、時雨蒼燕流山本武！少し古風な新進気鋭！続いてはライバルチーム！極限流先代最強の虎、ロバート・ガ

ルシア、全身凶器アンディ・ボガード、閃光の美学二階堂紅丸！ｔｈｅ　Ｋｉｎｇ　Ｏｆ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓのライバルで構成された強豪チーム！お次はＭＡＲＫ　ＯＦ　ＷＯＬＶＥＳチーム！ロック・ハワード、キム・ジェイフン、双葉ほたるで構成された身軽なチーム！ここからは若手チームの紹介だ！格闘技界の未来を担う若者達の紹介だア！先ずはコイツら！テリーと同じ帽子の跳ねっ返り、草薙明人がリーダーを務める新三種の神器チーム！メンバーは八神夕子、二階堂優作と、今大会にも出場している京、庵、紅丸の子供達！続いてはレインチーム！古武術＋マーシャルアーツのレイン・ハワード、元極限流最強の虎、勇人・Ｓ・ガルシア、ブーメランと実戦空手をミックスした全く新しい格闘技、風雲拳のゴウ・疾風！更に続けて九条栄助、カイル・ロランジュ、レイズ・Ｋのチーム ＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳ！続いてはツァイス・ヴィオレント少佐、藤堂カズヤ、ネロ・バーンシュタインの怒チーム！沢田吉久、山本宏人、獄寺弘のチームあさり一家！池沢優輝、磯崎愛、ソワレ・メイラのエージェントチーム！大門虎五郎、坂崎カイ、矢吹圭太郎の新日本チーム！かつてのサイコソルジャーチームの包率いる麻宮ケイタと龍太郎の新生サイコソルジャーチーム！」

　しかし、高らかに紹介された新生サイコソルジャーチームの顔色は悪い。何故なら…

「最後に紹介するのはコイツら！麻宮アテナ、麻宮拳崇、桃子の元祖サイコソルジャーチーム！」

とここまで紹介してから今度はルール紹介に移る。
「ルールは単純、気絶か、場外か。どっちかで負け、次に移ってもらう、先に相手チームを三人抜きしたチームの勝利だァ！ああああオレも出てえええ！」
うずいてきたらしいダックが引っ込むと今度は放送で
『それでは第一試合、ＭＯＷチーム対アメリカンスポーツチーム！上がってください！』
との声がかかり、会場がウオオオオオオオオ！と言う歓声で揺れた。

ＲＯＵＮＤ５　楓、立つ！

「いくぜオイ!ヘルバウッ…」
　大将戦、ロックと対峙したラッキーが必殺の一撃、ヘルバウンドを繰り出そうとするが
「そこだ!」
「なっ!」
「デッドリーレイブ!」
　レイジラン、Ｔｙｐｅシフトで素早く後ろに抜け、ラッキーの背後から乱舞を叩き込む。
　ゴギャッ!ドッ!ガツッ!ドッガアン!肘打ち、ローキック、上段フック、ハイキック、更に必殺のカチ上げ、気功の爆発。
　それらをまともに受けてラッキーが思い切り上に吹き飛ばされる。更に…
「レイジングストームッ!」
　気功の竜巻。そのままステージに崩れ落ちたラッキーが気絶しているのが確認された。

『決まったーっ！ヘルバウンドを繰り出そうとした瞬間決まった決着、予想以上の鮮やかさで決めたロック・ハワード！見事です！』

ワアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!

『さあッ！続いては月華の剣士チーム対元祖サイコソルジャーチームです！』

「ホントはうちのバカ旦那をこれでもか！っていうぐらいケチョンケチョンにするために出たのになあ。ま、いいや。楽しもうよ？」

「うちは楓が心配やさかいな。ん!?うちら二人とものろけ話しかしてへんやないの！はよ始めよ！恥ずかしなってきたわ！」

『ハイそれでは！桃子ＶｓあかりＶｓ始めエッ！』

「ハイッ！」

「わああっ！」

素早く繰り出された掌底を慌てて躱すとあかりは懐から白い人形を取り出し、

「行くでぇ…雷神！」

現れたのは鬼のような形相の鬼神、上半身だけの雷神だ。

「えええっ!?何これ!?」

「ごーー！」

あかりの号令と同時に雷神は手を伸ばし…あかりを掴む。

「へ?」
　そしてそのまま振り上げて…
「ちょっ!?まってまって!」
「えええええ!?」
　思いっきり桃子に向けて振り下ろす!
　ぐがごんっ!
「ぎゃあああああああああああ!」
　気絶した二人とこれで役目は終えたとばかりに鼻を鳴らして消えた雷神。会場が一瞬静寂に包まれる。
「……なんだそりゃ!?」
　一瞬間を置いて楓が言った。
「さっ、さてと!拳崇さん!２０年ぶりっスね!」
「おっ、おう!ほな、始めよか!」
　冷や汗たらたらの次鋒、武と拳崇がステージに上がる。
『でっ!では、気を取り直して!拳崇Ｖｓ山本武、始めエッ!』
「超球弾やア!」
「おおっと!」

拳崇が放った超球弾を武が愛刀、時雨蒼燕流で抜刀すると刀になる竹刀、時雨金時で切り払い、峰打ちの構えで突撃する。
「いくぜ！」
「そう簡単にはやられへんでぇ！」
と、ガードしようと左手を挙げる。
「ここだ！」
スカッ。しかしその左手に衝撃がない。
「なんやて!?」
「五月雨！」
左手一本で振るわれた峰打ちが拳崇の脇腹をしたたかに叩く。
しかしそのままの距離で拳崇が両手を使って武を捕まえた。
「なっ!?」
「うりやあ！」
そして巴投げ。続けてそのまま体を回転させて地面に両手をつき、体を捻る。
「龍顎砕やあ！」
そのまま飛び上がっての回転脚が武を巻き上げる。
そして着地した拳崇はすぐさま武の落下地点に跳び蹴りで先回りする。

「いくでえ!神龍天舞脚!」
「させっかよ!」
　空中で体を捻って拳崇の脳天を思い切り峰打ちで殴りつける。
「ぐえっ!?」
「いまだ!おりゃあっ!」
　一瞬時雨金時を放し、両手で拳崇を投げ上げてからもう一度掴む。
「時雨蒼燕流特式十三の型…雨雲返し!」
　一度振り上げ、振り下ろした刀身から迸る雨の炎の竜巻。それが拳崇を高く打ち上げ、場外に突き落とした。
「いっつつつ…すまんなアテナ。やられてもうたわ。」
「あ…やべ…俺も…キツいか…」
　場外で拳崇がアテナに謝罪すると同時に武も膝から崩れ落ちる。
「お疲れ様。拳崇。後は任せてね。」
「あかりさん、山本さんも、後は僕に任せてゆっくり休んでください。」
　ステージに二人が上がった瞬間わき上がる大将戦への期待のこもった大歓声。
「アテナ、行きまーす!」
「行きます!」

楓が疾風丸ではなく木刀を構えて走り出す。活心一刀流には刺突技もあるため真剣を峰打ちで使用するのではなく木刀を選択したのだ。
「はっ！」
「やっ！」
横薙ぎ、振り下ろし、切り上げ、突き、袈裟懸けと、流れるように楓が攻撃し、それをガードしながらアテナも蹴り上げては拳を繰り出し、蹴り、掌底突きを放つ。
「やりますね、ではそろそろ…」
一度アテナから離れた楓は一度目を閉じ、紙ゴムをとる。と、髪の色が金色に染まり、両手で握っていた木刀を片手持ちにかえる。
そして目を開いて真っ直ぐに見つめる。その目はさっきまでの漆黒の瞳ではなく、残酷なまでの鮮やかな真紅。
「本気で行くぜ？」
そしてもう一度、流れるような動きで剣撃を繰り出す。
「くっ！さっきまでとは桁違いね…シャイニングクリスタルビット！」
「うおっと…あぶねえあぶねえ。けどな。その光…」
と、木刀に凄まじい雷撃を纏わせて振り上げる。
「見え見えなんだよォ！」

そして思い切り振り下ろした雷撃がアテナにクリーンヒットした。
「くううッ…サイコボール!」
「空牙ぁ!」
サイコボールを飛び上がりながら切り裂く。
「サイコソードッ!」
「おわっ!」
体を捻り、位置を変え、滞空時間まで変えてサイコパワーの剣を振り上げたアテナより速く着地する。
「まだよ!」
「おもしれえ!見せてやるよ…」
そのままアテナは空中でサイコパワーを使って静止する。
「インフィニティフェニックス!」
そして不死鳥のオーラを纏っての突撃。しかし楓は一向に動じずに木刀をステージに突き立てる。
「俺の本気を!」
突き立てた木刀から立ち上がる雷の竜が不死鳥のオーラ越しにアテナを吹っ飛ばす。
そして更にその先に回った龍が落下しながら突撃する、これを3往復。

「きゃああっ！」
「アテナ！」
体力を使い果たした状態で場外に倒れたアテナに覚醒が解け、もとの黒髪に戻った楓が
「大丈夫ですか？」
「気絶しとるけど、そんだけやし、傷跡も残らんやろ。きいつこてくれたんやな。」
「ええ、まあ…」
と、ここまで言ったところで
「やったー！うちらの勝ちやー！」
と、楓にあかりが抱きついてきた。
「うわわわわわ！ちょっ!?あかりさん!?何やってるんですかこんなところで！離れてください！」
真っ赤になってあたふたする楓にあかりはしれっと
「いややー。嬉しいんやもーん！離れへんで～！」
と返す。そんな様子を見ていて拳崇は一言
「見とって暑苦しなってくるなあ。」
と呟いた。

ＲＯＵＮＤ６　新たなる神器、来る！

『さあ、第三試合は新三種の神器チーム対新日本チーム！』
「先鋒は俺だな。」
　優作が前に出ると虎五郎がそれに応じ、
「紅丸殿のご子息とて容赦はせぬぞ。」
「そりゃこっちの台詞。いかにも動きにくそうな投げ技ごと蹴っ飛ばしてやるぜ。」
『それでは、優作Ｖｓ虎五郎、始めエッ！』
　先に動いたのは虎五郎。
　下駄のカンコンカンコンというかつて悪魔の足音と謳われた音をお供に距離を詰める。
「雷光拳！」
　優作が下駄キックにカウンターを合わせるように雷を纏った正拳突きを放つがそれを姿勢を低くして躱す。
「何イッ!?」
「もらった！」

虎五郎が優作の体を掴み、地獄極楽堕としに持って行くかと思われた瞬間、その姿がふっとかき消える。
「何イッ!?」
「そっちは鏡だ！幻影ハリケーン！」
虎五郎の後ろから優作が連続で幻影を飛ばす。
「ぐうううううっ！」
「バカなっ!?俺の幻影ハリケーンを全てガードしただと!?」
「今だ、超大外刈り！」
「うおおっ!?」
『うまいッ！虎五郎選手、優作選手の必殺技後の隙を突き、超大外刈りでダウンまで持って行き、そこからの…地雷震だあ！』
地面の震動でダメージを与える大門親子の十八番、地雷震がクリーンヒットし、優作の体が宙を舞うが、
「まだだぜ、フライングドリル！」
空中で体を捻って体勢を立て直すと、続けてそのまま錐揉み回転、ドリルのように回転しながら虎五郎の頭部に踵を落とした。
「ぐうっ!?」

「今のも鏡だ!本体のフライングドリルを喰らえイ!」
そしてもう一撃フライングドリル。
ふらつく虎五郎にも容赦ない連撃。そもそも一撃の威力が明人や夕子に比べて軽い優作の基本は意表を突いてのコンビネーションにある。
『これは…ローキックからの居合い蹴りという必勝パターン!優作選手、速くも決着をつける気だァ!』
「いくぜ!」
そのまま居合い蹴り、反対側の足でもう一撃、更に居合い蹴りの方の足で雷を纏ったサマーソルトキック、通称稲妻キック。それらのコンビネーションには特別な名がつけられている。
「反動三段蹴り!」
「ぐおあっ!?」
「まだだぜッ!エレクトリッガー!」
顎を蹴り上げられ、隙のできた虎五郎をひっつかみ、全身からの放電を喰らわせる。
「ぐう…だがまだだ、フンッ!」
「ばかな!?電撃を喰らっている体でそのまま俺を掴みに来やがった!?」
「ふぬあっ!」

うおあああっ!?と言う声を上げて優作が大きく投げ上げられ、叩き付けられる。
「げふッ!?」
「行くぞ…驚天動地!」
そのままダウンした優作に強烈な地雷震が炸裂した。
「ぐあああああっ!!」
振動で大きく吹っ飛んだ優作が場外に放り出される。
「ハア、ハア、ハア…よしっ!」
「ツつう~…それじゃ夕子、あと、頼んだぜ。」
「・・・・・」
鮮やかな赤毛をゆらして虎五郎と対峙した夕子は一瞬だけ構えるとすぐに尋常ではない瞬発力で駆け出した。
「ふっ!はっ!」
そして左右のショートアッパーの連打。八神流古武術百弐拾七式、葵花だ。そこから少し飛び上がって赤紫の炎を纏った一撃。
「ぐっ!?」
「まだよ!百式、鬼焼き!」
続いて肘打ちからの飛び上がりながらの裏拳。

「おおおっ!?」
「これで終わりよ！裏千弐拾九式・焔颪！」
　飛び上がった勢いのままに虎五郎の頭を掴んで地面に叩き付ける。そして。
「はあああああっ！」
　大爆発。赤紫色の爆炎と共に虎五郎が吹っ飛ばされ、動けないままステージに倒れ伏す。
「え…次…俺なんスけど…なんつーかその…お手柔らかにお願いします…」
「最初からいくわよ！」
「え〝え〝ッ!?」
「禁千弐百拾壱式・八稚女！」
　圭太郎がステージに飛び込むやいなや低い姿勢での猛ダッシュ。一瞬で距離を詰めてボディブローを放つ。
「げふっ!?」
「いいから！私の！邪魔を…」
　父、庵であれば泣け！叫べ！そして…のあたりが違うし、斬撃が打撃になっているがそれは紛れもない八稚女。
「しないで！」

「ぎゃあああああっ!?」
秒殺。ギャグマンガのように吹っ飛んだ圭太郎はあっさりと場外へ。
「ま…なんつーかね…あいつはギャグキャラだったが俺は…」
と、ステージに上りながらカイは言う。
「ひと味違うぜ！虎煌拳！」
ひと味違うの言葉通り、気力を溜めるモーションもなく放たれる虎煌拳。
「くっ！百八式・闇払い！」
咄嗟に走らせた炎で虎煌拳を相殺したがその後ろからはもう一つの気功弾。
「なにっ!?」
「へへッ。なんちゃってベノムストライク。そしてェ…」
ベノムストライクがヒットし、少しだけ仰け反っている間に瞬時に距離を詰め、
「極限流奥義ぃ！」
極限流の技の中でもＫＯＦに出場するほどの実力がある者は皆持っている必殺の猛ラッシュ。それが…
「龍・虎・乱・舞ッ！オラオラオラオラァ！」
激しく撃ち込まれる突きや蹴り、手刀の乱舞。そしてシメは…
「極限虎砲！天地覇煌拳！」

左ボディからの乾坤一擲右アッパー。そこから続く正拳突き。最後はもちろん
「覇王翔吼拳!」
「きゃあっ!」
最後の覇王翔吼拳に弾き飛ばされた夕子の体は勢いよく客席のフェンスへ。
「しまッ…!」
「まずい!」
「くうっ…!」
優作とカイが焦りの声を上げ、夕子が歯噛みしながら受け身をとった瞬間、明人の姿がふっとかき消えていた。
「おおおおおおおおッ!!!間に合えええええええッ!」
ガシイイッ!全速力で軌道上に割り込んだ明人が夕子の体を受け止め、思い切り地面に踵を突き立てて食い止める。
「ふうッ…なんとか間に合ったみてえだが…怪我はねえよな?」
「え…ええ…ありがと…」
・・・・・・
と、そんな様子を控え室へと続く通路から見ていた京が呟く。
「明人の奴…ちょっと修行みねえ内に速くなってんじゃねえか…にしても、」

と、もう一人同じ場所から見ていた赤毛の男に偽悪的な笑みを向ける。
「テメエンとこの娘さん、明人に気があるみてえだぜ？いっそこのままゴールしちまうんじゃねえのか？なあ、八神よ。」
「フン、あいつが誰を好こうが俺が貴様を殺す事実には変わりない。それに俺はそれ以外なら誰がどうなろうと知ったことではない。」
「とかいって、さっきはものすげえ慌てて飛び出そうとしてたじゃねエか。今だってほら。」
と、庵の右頬を指さす。
「そこ。さっきの冷や汗が残ってるぜ？男のツンデレに需要はねえよ。隠すのなんてやめちまいな。」
「試合を楽しみにしていろ。すぐに切り刻んでやる…」
「おお、こわ。オイ見ろよ。そろそろ大将戦が始まるらしい。リョウ、おれンとこの糞ガキかアンタのとこの息子さん、どっちが勝つか楽しみだ。」
「そうだな。無敵の龍か草薙の剣か。果たして今、どちらが強いか…しっかりと見極めさせてもらうか。」
・・・・・
「手加減無しだぜ、カイ！」

「そっちこそな、明人！」
『さあ、いよいよ本日最後の試合となります、新三種の神器チーム対新日本チーム大将戦、始めてください！」
「虎砲疾風拳！」
「毒咬み！」
　カイが突っ込み、それを鋭く踏み込んで打点をずらすことで躱す明人。そこから
「ボディがッ！」
　矢吹真吾のメモに曰く「右足を鋭く踏み込み、そのまま拳をねじり込む！」その通りに毒咬みがヒットし、
「あめぇッ！」
　八錆、続いて
「ぜっ！」
　七瀬！カイを大きく蹴り飛ばす。そこからさらに
「百壱式・朧車！」
「げふっ！」
「そらそらそらあッ！落ちやがれ！」
　空中での連続回し蹴り、そしてそこから派生する踵落とし。

「くうっ！」
「まだだぜ、虎伏せ！」
さらにダウンしたカイに手痛い一撃。
「クソッ！こうなりゃ一か八か！極限流奥義、覇王翔吼拳！」
巨大な気功弾で反撃を測るカイ。すぐに龍虎乱舞の始動でそれを追う。
（覇王翔吼拳が決まれば追い打ち、防がれてもガードが外れたところに龍虎乱舞を…何ッ!?）
「うけろ！」
と、覇王翔吼拳をガードし、そこから突進してくるカイに向かって…
「こンのブロォーッ！」
強烈なボディーブロー！
「げふッ!?」
「これで終わりだぁ！秘奥義裏百八式…」
思わず体をくの字に追ったカイの目に移るのは右手を掲げ、全身に炎を纏う明人の姿。
「大蛇薙だアアアッ！」
凄まじいまでの炎がカイの体に襲いかかり、その圧倒的な勢いでもって場外にたたき

出した。
「ツつー…あークソッ、完敗じゃねえかよ。」
「へへッ。燃えたろ?」
『決まったァーッ!本日最後の試合、勝者は新三種の神器チーム!』
・・・・・・
「あれっ?綱吉さんじゃないですか、なんで参加してないのにセカンドサウスくんだりにいるんです?」
ホテルに戻りさあ部屋で一休みしようというタイミングで「お疲れ様」と声をかけてきた綱吉に明人が質問した。
それに応えたのは同じく月華チームで出場していた武だ。
「そりゃもちろん、生で試合を見たかったんだろ?それにここはボンゴレが経営してるホテルだからな。オーナーから利用客への挨拶を…ってトコだろ?」
「ハハッ。さすが武。よくわかってるね。一応チーム単位で部屋を取ってあるからどうぞごゆっくり。あ、ソワレさんはどうします?」
「俺は久々に兄貴ンとこのアジトで泊まるよ。ユウキとアイで広々使いな。」
と、そういって一人でホテルを出て行く。それを見送った明人と夕子の腹が同時に「グウ〜。」という音を立てた。

「あっ！」
「ヤベッ！」
二人共が慌てて隠そうとするより先にテリーが両脇に抱え込み、
「ＯＫ！だったらみんなでリチャードんトコに食いに行こうぜ！案内は任せな！」
味は？と訊く優作にはライバルチームのアンディが
「心配要らない、酒はともかく飯は最高さ。兄さんじゃないがあそこのホットドッグは絶品だね。」
そこで大声を出してしきるロバート。
「ほな皆さん、行きましょか！お代はテリー持ちや！」
「なんでだよ!?」
「兄さん、少なくともツケの分は払っておきなよ…」
「わあったよ！いいから早…」
「グウ～。」どうやら全員空腹の限界が近いらしかった。
・・・・・・
「ああ、うまかった。俺先に寝るからな。」
そういって優作がベッドに潜り込み、さっさと寝てしまう。
シャワーだけ浴びて俺ももう寝るか。なんて考えた明人に夕子が声をかけてきたの

はそんなときだ。
「どした?」
「あのときは…ありがとう…」
「気にすんな。俺が助けたかったから助けただけだ。」
　暫くの静寂。明人がそれに耐えきれなくなった頃に夕子が口を開く。
「初めて会ったのは…七年前だっけ?」
「ああ、菊理さんが死んで、庵さんも行方不明ッてんでちづるさんを通してウチに居候することになったのが、出会いだったっけかな。あのときはびっくりしたよ。何せ初対面の女の子に飛びかかられたんだからな。」
「なんの苦労も無さそうで…ただ、あのときは気に入らなかった…でもあのとき、明人は反撃しなかったよね?」
「そっ!そりゃあなあ。」
〈なんでこうげきしてこないの!?〉
〈きみがかなしそうだから。〉
　夕子の脳裏に浮かぶ八歳の頃の自分たち。
　あのとき自分は泣きながら拳に炎を宿して明人に襲い掛かった。しかし明人は裁きこそすれど反撃しなかったのだ。

〈なんで!?なんでわたしみたいなばけものにやさしくするの!?〉
〈べつに。ぼくにはきみがばけものになんてみえないよ。ただのないてるおんなのこだよ。〉
「泣いてるヤツに攻撃するなんて男のすることじゃねエよ。それに、あん時お前は自分のことを化けモンなんて言ってたけどな。俺に言わせりゃちょっとオロチの血が混じってるからって普通の人間とかわりゃしねエと思うぜ。」
〈へへっ。そうやってわらってたほうがかわいいよ。〉
「!!!」
!!!」
その後少しだけ笑った当時の夕子にかけた言葉がよみがえり、明人の心拍数が急激に跳ね上がる。
「あっ!あん時言ったことは今でも覚えてるし、今でもそう思ってるぜ!」
「えっ!?」
二人とも顔を真っ赤にしてしばらくしてからぎこちなく
「じゃっ!じゃあ俺も寝るから!」
「おっ!おやすみなさい!」
と、二人とも眠りにつこうとした。しかし心臓がバクバク言っている内は眠れるわけもなく、しかしそうとは知らずにしっかり盗み聞きしていた優作が思わず

「おあついねえ。」
と、呟いた。
・・・・・・
翌朝…
「さあッ!今日の第四試合は俺達あさり一家の初陣だ!気合い入れていこう!」
「「おー!」」
ホテルのロビーで吉久、宏人、弘の三人が気合いを入れている。それを見ていた綱吉がふと目をやると、ロビーの端の方でボロボロになった優作がぽつねんとたたずんでいた。
「どうしたの?優作君?」
「俺、神に誓って言います。人の色恋沙汰には金輪際聞き耳を立てません!」
「やったんだ…」
そういえば昨日彼等の部屋から「ほうりゃあ!」とか「くらいやがれえ!」とか「葵花!」とか聞こえてきたなあ。と冷や汗を浮かべて思う綱吉であった。
とにもかくにも二日目のはじまりだ。

ＲＯＵＮＤ７　ボンゴレＸＩ世、来る！

「極限流奥義！」
　ロバートが包に向かって突撃する。
「そりゃっそりゃっそりゃぁっ！」
　お得意の龍虎乱舞から更に続けて連続蹴りに入る。
「まだやで！無影疾風重段脚！」
　幻影脚からの龍斬翔、更に続けて…
「どないや！」
　飛燕疾風脚！
「ぎゃふっ!?」
　気絶。ロバートの勝利である。２０年前に比べてウェーブがかった髪を掻き上げて
「修行が足りんなぁ。」
　と得意げにコイントスをしてみせるロバート。そのステージの外では
「兄貴、俺ら戦闘シーンすらなかったな。ヘビィ・Ｄ！とかブライアン・バトラーと一緒やで。」

「せめて龍撃拳で吹っ飛ばされるシーンぐれえあってもよかったな。」
　等とブツクサ言っている麻宮兄弟だがつべこべ言うな!一応二人がかりで紅丸倒したんだから!
『それでは次の試合、あさり一家対レインチーム!』
「うおおおおおおお!一番手はこの俺が引き受けたあああああ!」
「うるせえ奴だな…若大将!露払いは任せてください!」
「分かったよ、弘に任せる。」
　と、吉久からの了解を得た弘が左中指に赤い宝石のはまった嵐属性のリングをはめる。
　腰に吊られているのはいくつかの小箱。この時代、すでに裏社会で普及している匣兵器だ。
　対するはゴウ・疾風。
　実戦空手道とブーメランをミックスした全く新しい格闘技、風雲拳の使い手らしいが、その名が知れ渡るのは次の世代、息子のショー・疾風が獣神舞闘会で活躍するようになってからのことだ。
　とにもかくにも試合が始まる。
『それでは弘対ゴウ!始めェッ!』

「名前はまだないが、喰らえィ！」
「西瓜！ダイナマイト！」
ゴウがブーメランを投擲するまでの間に弘は2つの匣を開け、耳に嵐の炎を宿した猫、嵐猫（弘は父、隼人の瓜にちなんで西瓜と名付けた）と導火線に死ぬ気の炎を灯したダイナマイトを呼び出す。
「はっ！」
「フーッ！」
ダイナマイトの煙幕で狙いをずらし、それを西瓜がたたき落とす。
「なんの音だ!?まさか、俺のブーメランが!?」
「そのまさかだよ！」
ドボッ！と煙幕に隠れて接近した弘がボディブローを喰らわせ、すぐに離れる。何故離れたのか？そのまま連打で勝負を決めるのがセオリーでは？
答えはその直後、ゴウの懐でドゴンッ！という音と共に起こった爆発により示される。
「ボンバーブロー…ってな。」
カラクリは実に単純。チビボムを握り込んだ拳を叩き込み、そのまま相手の体にチビボムを仕掛けるだけだ。そうすれば導火線が無くなったとたんに爆発し、ボディブロー

よりも遥に高いダメージが期待できる。
「くう…ならば！極限流より見いだしたこのオレの最終奥義を喰らうがいい！名付けよう、その名は！」
そこでまた一頻りうるさい叫び声を上げて言う。
「無双乱舞だ！うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
と、乱舞技のセオリー、突撃してからの拳と蹴りの乱舞に持ち込もうとするゴウだったが
「あめぇ！ゼロ着火！」
と、またしてもダイナマイトで煙幕を張られ、攻撃する対象を見失う。
「ヌウッ！何処だ!?」
「アタシの位置は教えられねえが、ダイナマイトの位置なら教えてやるぜ。」
煙の中を移動しながら弘がダイナマイトの位置を告げる。
「現在急速接近中！お前の周り全てだ！」
「なにぃっ!?ぐわああああああああっっ！」
周囲から迫るダイナマイト。後ろから火を噴いて突撃してくるそれにゴウは場外へ飛ばされる。
得意げに人差し指を突きつけた弘は先ほどと同じように

「五倍ロケットボム。」

と、技の名を告げた。ちなみにそれを中継で見ていた母の獄寺ハル―旧姓三浦―はその様子に

「はひっ!?ひょっとして隼人さんかなりバイオレンスな事教えたんじゃないですよね!?」

と、隣でコーヒーをすすりながら同じく試合を見ていた隼人の詰め寄ったんだとか。

ちなみに答えは

「護身術程度にな。」

だそうだ。所戻って試合会場。勇人が親譲りのスピードと手数を是とする極限流を駆使して弘を場外に投げ飛ばした。

「やっぱりロケットボムじゃあいつには勝てないか…若大将、頑張ってください!」

「任せて、オレが勝ってみせるから。」

そういって吉久がオープンフィンガーのグローブをはめ、額に大空属性のオレンジの炎を灯す。

「お前さんがカイからきいた吉久かいな?ほんでお前さんのダチのあの黒髪剣道男が山本宏人で、お前さんの彼女が獄寺弘ちゃん、ね。わいは…」

「君のこともカイからきいてるよ。あいつのライバル、現極限流最強の虎、勇人・S・ガ

ルシア、だね?」
「お互いに相手のことも少しはしっとると。ほな、今晩はわいらと飯でも食いにいこやないの?」
「もちろんリチャードさんの店で…ねっ!」
ガキイン!吉久と勇人が同時に踏み込んで繰り出したフックがぶつかり合い、小気味よい音を立てた。
「負けた方の奢りだ!」
「上等!腹一杯奢ってもらうで先に礼ゆうとくわ、グラシアス!おおきに!」
勇人が切れ味鋭い足技で攻めれば吉久はトリッキーにすら見える動きでそれを躱して拳を叩き込む。
「いくで!」
と、勇人が掌に気を集中させる。
「龍撃」
そして生み出した球体を
「拳ッ!」
床面ギリギリの高さで蹴り出した。
「甘いッ!」

それを炎の推進力で少しだけ浮いて躱し、そのまま体を回転させ、サマーソルトキックを放つ。
「ぐわっ！」
「はあっ！」
そして仰け反った勇人に正拳一撃！
「ぐえあっ！」
思い切り腹に喰らった勇人がステージに崩れ落ちる。
「ぐ…ま…参った！わいの負けや！」
「それじゃそっちが奢りだね、ディ・モールトグラッツェ！」
さわやかに言い切った吉久に「未恐ろしいやっちゃな。いでででで」等と言いつつ退場していく勇人と入れ違いにレインがステージに上がる。
「最後は…俺か、ちっとばかしきついな、前提条件が2タテってのは。けどま、なんだかんだでやってやるさ。」
「ひと味…違うのか」
「いくぜ」
ガッ！
「ぐはっ!?」

「ハードエッジ。言ったろ?ひと味違うし、なんだかんだでやってやるってさ。」
ゴスッ!吉久のボディブローがレインの腹に突き刺さる。
「負けるわけにはいかないよ!奢りのご飯がマズくなっちゃうからね」
「ハハハッ!おもしれえやつだな。」
ドッ!ガキッ!スパァン!バキッ!ガコッ!ズドッ!両者互角。若手の中でも指折りの実力者であるレインと互角に渡り合える吉久もそれほどの戦闘センスがあると言うことだろう。
「ダブル烈風拳!」
「グランドアッパー!」
烈風の如き気を飛ばす必殺技、烈風拳を二つ重ねたそれに吉久は極端に低い姿勢から放つアッパーカットで迎え撃つ。
ダブル烈風拳を高純度の炎で相殺し、拳そのものでレインの顎をカチ上げた吉久は続けてがつんがつんと連続でサマーソルトキックを決め、とどめに踵落としを決める。
「くっ!」
「ジェットアタック!」
急加速して突進する吉久をしかしレインは
「簡単すぎるぜ!」

といって掴み、床面に叩き付ける。
「あっ、ありゃあギースの当て身投げじゃねエか！」観客席にいたムエタイ王者、ジョー東の驚愕の叫びが響く。
「まだだっ！」
ドギャッ！吉久が跳ね上がりながら蹴りを放ち、レインを仰け反らせる。
「くっ！」
「今だっ！うおおおおおおおおおっ！」
怯み、体勢を崩したレインと体勢を立て直した吉久。そして吉久の渾身の正拳突きがもろに入った。
「げふっ！くっ！カハッ！ぐうう…」
蹲りかけるレイン、しかし一瞬その目に気迫をみなぎらせ、渾身の力で地面に拳を叩き込む。
「なにっ!?」
ドオン！地面から立ち上がった気の柱が吉久を大きく吹っ飛ばした。
どうにか空中で静止した吉久がレインの方を向くと彼は
「クソッ…限界ギリギリのパワーゲイザーでも…参ったな、俺にはもう戦う力なんてねえ。降参だ。」

といって仰向けに寝転がった。

『一回線第四試合、あさり一家対レインチーム、勝ったのはあさり一家だあ！続いては注目のカード！抽選係が何をトチ狂ったのか初戦からぶつかるライバル達！チーム「ｔｈｅ　ｋｉｎｇ　ｏｆ　ｆｉｇｈｔｅｒｓ」対庵チームだ！』

ＲＯＵＮＤ８　燃える因縁

「帝王宿命拳！」
　崇雷の放った光弾がテリーに迫る。
「ＬＩＶＥＷＩＲＥ!!」
　ドドン！二つのパワーゲイザーが宿命拳を掻き消し、更に崇雷を浮かせる。
「ＧＯ　ＢＡＮＧ!!」
　ドゴォン！三発目のパワーゲイザーが更に大きく弾き飛ばす。
「ＢＵＲＮＩＮＧ！」
　続けて落下点を予測してのバーンナックル。
「ぐあぁっ！」
　場外に殴り飛ばされた崇雷に崇秀がステージに上がりながら声をかける。
「後は任せてください、兄さん。」
「ワリイな、んじゃ頼むわ。」
「行きます！」
　と、崇秀が身をかがめ、

「流星らぁく！」
　スライディングからの踵落とし、キム一門の得意技の一つ、流星落を放つ。
「ＰＯＷＥＲ　ＣＨＡＲＧＥ！」
「帝王神眼拳！」
　ショルダータックルで踵を受け止めたテリーの後頭部に手刀がヒットした。
「ぐはっ！」
「ここだ！鳳凰神眼連撃！」
　足技の乱舞である鳳凰脚に手刀である帝王神眼拳を絡めた必殺技だ。
「でりゃりゃりゃりゃりゃあ！」
　次々にコンビネーションが決まっていく。
「これで！」
「ぐふっ！」
　止めとばかりにテリーの腹に膝蹴りを叩き込み、
「終わりです！」
　グギャアアアアアアア！という音と共に猛り上がる龍のオーラを纏ったサマーソルトキックでテリーの顎をカチ上げる。
「がはぁ!?」

「決まりです！」
「まだだぜ！ＰＯＷＥＲ　ＤＵＮＫ！」
　ゴッ！空中からパワーダンクを繰り出し、崇秀を地面に叩き付けたあと、そのまま両の拳を地面に打ち付ける。
「とどめだ！ＰＯＷＥＲ　ＳＴＲＥＡＭ！」
「ぎゃあああっ！」
　テリーの全身から吹き上がる気の奔流に崇秀が高く吹き飛ばされた。これで終わりかと思われたその瞬間。
「せめて相打ちに！帝王漏尽拳！」
　崇秀が力を振り絞って光弾を放つ。
「ぐあああっ！」
「僕も・・・ここまでです。ぐえっ！」
　直撃を喰らって倒れるテリーと情けない声を出して場外にブチ落ちた崇秀。
「いっつ～…すみません八神さん、あと、頼みます。」
「くだらんな。」
「やれやれ、そういえばあなたはそういう人でしたね。」
「リョウ、テリーを頼むぜ。」

「まかせろ！」
　そしてステージの上に立つのが京と庵だけになった時、庵が口を開いた。
「結構な人数とやり合ったようだが、くたばりぞこなったようだな。」
「ヘッ、テメエの都合で生きちゃいねえよ。」
「いくぞ！」
「いくぜ！」
　そして二人は同時に右手に炎を宿して、その手を振るう。
「「百八式、闇払い！」」
　同時に放たれた二つの炎がぶつかり合い、周囲に火の粉を振りまく。
「葵花！」「百十四式、荒咬み！罪詠み！罰読み！」「屑風ェッ！」「うおっ!?やべっ！」
「禁千弐百拾壱式、八稚女！」「うおおっ！」「泣け！叫べ！そして…」「喰らいなァ！」「ぐはッ!?」
　ショートアッパー二連に対してフックからのカチ上げ、そのままアッパーカット。それを掴んで後ろに抜き、たじろぐ敵に十八番。そこへ更に渾身のハードブロウと凄まじいレベルの攻防が繰り広げられる。
「俺からは逃げられねえんだよ！」
　神塵がヒットし、爆発の炎を突き抜けて左右の拳を振るう京の姿が飛び出す。

「ふっ！はっ！」
　そして全身に炎を纏ったままでの二枚蹴り。
「撃ち抜けェ！」
　とどめに百式、鬼焼きを決めて着地する。庵も両手足を使って着地、そのまま京に突進する。
「楽には死ねんぞ！」
「ぐっ…か…い、息が…」
　京の喉元を引っ掴んで引きずり揚げ、庵がその身を青紫の炎の中に隠す。
「うおおおおおおおお…」
「が…」
　そして一度凄まじい熱量を振りまいた瞬間、青紫の爆発が観客の視界を焼いた。
「ここまでだ！」
「てめえがな！」
「なにいっ!?」
　そして肘で庵の頭をカチ上げ、続けて左手で首根っこを引っ掴み、更にカチ上げる。
「琴月陽！」
　続いて爆発。しかし庵も負けじと受け身を取り、一足飛びに京の頭を押さえつけ、地

面に叩き付ける。

「琴月陰！」

　再びの爆発。両者共に足下がふらつき、立っているのが精一杯といった様子だ。

「ゼエ、ゼエ、この野郎、随分と」

「ハアッ、ハアッ、腕を上げたじゃあ、ないか…」

「それじゃあ次で…」

「終いに、するか…」

　ふらつく足をグッと踏みしめ、しっかりと立つ。互いに右拳に全力の炎を宿す。

　そして…

「京オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！‼！！！」

「八神イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！‼」

　ボッツッツゴオオオオオン！！！！！

　クロスカウンター。互いの拳が交差し、相手の右頬を正確に撃ち抜く。そしてそれ以上ないほどの爆発が巻き起こり、互いに吹っ飛ばされる。

「ぐっ…」

　京は辛うじてステージ上で止まった。しかし俺は

「ぐはっ！」

ステージから飛び出し、地面に背中を打ち付けた。
「ハハッ…やったぜ…ざまあ見やがれ、や…が…み…」
そして満足そうな笑みを浮かべたままで意識を失う京。
『凄まじい接戦を制したのはチーム「ｔｈｅ　ｋｉｍｇ　ｏｆ　ｆｉｇｈｔｅｒｓ」！草薙京、八神庵、両選手に惜しみない拍手を！』

ＲＯＵＮＤ９　なまっとりゃーせんが!ユウキ、怒りのネオジオ乱舞!

「んで?俺達ＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳの相手はまだ来て無いから、先にエージェントチーム対怒チームをやるわけ?」

と、控え室にやってきたダックに問いかけるのはチームＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳのリーダー、九条栄助だ。

「ああ、ワリイな、それまでの間、ま、必要ねえかもしんねえけど、ヒマそうだからよ、チーム制になった一番最初のＫＯＦの話をしてやる。あれは…」

栄助、レイズ、カイルの三人が控え室でダックの話を聞いている頃…

「クソッ!近づけねえ!」

「えーん!なんで当たってくれないのよ~!」

互いに先鋒同士がぶつかり合う第一ラウンド。ネロ対アイだ。

ネロは一定の間合い以上近付けばアイが首から提げた端末で呼び出したブロックを頭に喰らうため、近づけないでおり、しかし完璧に回避しているので千日手とも呼べる戦闘が展開されている。

「ええいッ！埒があかねえ！」
と、ネロが一気に前傾し、
「多少のダメージは覚悟して…突っ込む！おりゃあああああ！」
右足で力強くステージを蹴って突撃する。
「ぐっ、がっ、くっ、うあっ」
ブロックを喰らうたびに少しだけ声を上げるがしかしそのスピードは止まらない。
そして遂に懐へ飛び込んだ！
「G・クレイス！」
右足を勢いよく振り上げ、思い切りカチ上げる。
「ジョイジョイバルーン！」
「何イッ!?気球を召喚って…そんなのアリかよ!?」
「急降下！」
いったん気球を呼び出し、ネロからの追い打ちを避けると続けて気球を消し、一気にネロの頭上に墜落する。
「あだっ!?」
「えーい！」
今度はバットを召喚し、フルスイング。

「うおおっ!?こうなりゃヤケだぜ!ゴッドプレッシャー!」
　思い切り突撃し、アイを体ごとかっさらって場外へと運び去る。しかし…
「うくっ…アンタ…どうやって戻るの?」
「あ。」
　ドゴーン!
「きゃあっ!」
　アイを壁に叩き付けたネロはそのまま…
　スタッ。
「やっちまった…」
　場外に着地した。
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「えええええええええええええええええええええええええええええ!?」
『なんという尻切れトンボな戦いなのでしょうか!あれほど序盤はいい感じだったのにオチが技の選択ミスによるダブル場外!次はこうならないようにお願いしたい!藤堂カズヤ選手対ソワレ・メイラ選手!』

「さあてと、始めようぜ、ガキ。」
「はい。では…」
カズヤが構えを取り、次の瞬間小さく下に向かい、弧を描くようにして腕を振った。
「うおおっ!?こいつは!?」
次の瞬間自分に向かって襲い掛かる衝撃波を蹴り潰して凌ぎ、続いてカズヤの構えをみて合点がいったような顔をする。
「ははあ…これが噂の藤堂流…重ね当てか。」
「ご存じでしたか?」
「ああ、ウチの上得意さんからいろいろとね。じゃ、こっちも!」
と、すかさず繰り出したのはスライディング。
難なく躱し、空中から重ね当てを放とうとするカズヤの目に映ったのは両手を突いて無理矢理停止、倒立に移るソワレの姿だ。
「なっ!?」
「おらよっ!」
そのまま手をつき変えての回し蹴り。
「がふっ!」
「どんどんいくぜ!」

そのままハンドスプリングで元の体勢に戻り、蹴りの連打。続けて姿勢を下げ、二連の回し蹴り。更にその状態で更に回転しながら蹴りを繰り出し、倒立するとカズヤはまるで踊っているかのような格好で蹴り飛ばされた。そもそもカポエラの特徴はそのリズミカルな動き、攻撃する側がリズムに乗っていれば自然受ける側もリズムに乗らざるをえない。

「スイスイーっと!」

仕上げとばかりにとどめの蹴りを放つ。

「ぎゃふっ!」

思い切り蹴り飛ばされたカズヤは場外に落ちそうになる。

しかし

「まだだ!藤堂死炎流の神髄、見せましょう!」

と叫び、額から青い死ぬ気の炎を吹き出させ、その推力を持ってステージに戻った。

「死炎隕石!」

「うがっ!」

フルスピードの頭突きを受け、ステージ上を滑っていくソワレだが、両足＋右手で無理矢理に押しとどめる。

「今度は…ツナや吉久みてえだな。」

「こうなったら、僕の勝ちです。行きますよ！」
「来いよ。」
「はあっ！」
　またしてもフルスピードでの突撃、そしてその両手は重ね当ての型を作っている。
「死炎沈静重ね当て！」
「おおわっ！」
　辛うじて突撃と重ね当ての両方を躱したソワレだが、次の瞬間その表情から焦りが消え、余裕が取って代わる。
「こんどこそ！」
（見えた、あの一瞬で…）
　先ずは重ね当てを回転脚で払い、次に突撃を仰向けに寝転んで躱す。そして…
「ここだ！」
「しまッ…！」
　両足で首を固め、そのまま両手をつく。
「ぬおおおおお！」
　振り子の糸に指をあてると指に巻き付くようにして一回転する。
　それと同じだ。振り子はカズヤ、糸はソワレ、手をつくという行動が指をあてること

と同じだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「ぐはっ！」

回転するようにしてカズヤが場外に吹っ飛ばされるがソワレはステージ上で床面に叩き付けられる。

と、

「♪上から目線で偉ぶってみたが、子猫のように大人しくなってるぜ♪」

と、２３年ぶりになる子猫ラップで健在ぶりをみせつけた。

「やれやれ、こっちは最後かよ。けどま、こっちも仕事なんでね。手加減はしねエぜ？」

「上等！おりゃあああ！」

死炎隕石のダメージと払いのけた重ね当ての鎮静効果、そして床面に叩き付けられたダメージから、長期戦は無理だとわかっていたがゆえにソワレは一気に勝負を決めるべく自らの十八番、ダブルウェンズデーで勝負を決めに行く。

しかしツァイスは避けようとせずに体を思い切り捻り、

「ねりゃあああ！大佐直伝、ギャラクティカファントム！」

「ぐがっ！」

腰の入ったハードブロウを喰らい、ソワレの体が一撃で場外に飛ばされる。

「いづづづ…マジでラルフ大佐の教え子かよこいつ。クソッ、ユウキ、後は任せるぜ？」

「オーケーオーケー。任せなさい！」

と、自信満々ステージに上がるユウキに

「あれ一発で終わっちゃうかもしれないのに、何呑気なこと言ってんのよ。バカユウキ。」

と、後ろからアイが辛辣な言葉を投げかける。

「こっちも仕事やから、負けれんでな。悪いけど…」

「は？何言ってンだおまえ？なまりが強くてわかんねえぞ？」

うっかり飛び出した広島弁に対して地雷にダイナマイトを投げ込むようなツァイスの台詞。案の定ユウキは爆発する。

「コンのぉ…」

「あ？」

超ド級！と叫んでユウキが突っ込む。

「ネオジオ乱舞！」

「げふっ!?」

「だあから…」

ボコボコにぶん殴ったあとで思い切りカチ上げ、自分も飛び上がる。そして手首に取り付けたカードリーダー型の小型兵器を突きつけ、
「なまっとりゃあせんがあああああああああああああああああああ!」
「ぎゃあああああああああああああ!」
思い切りビームをぶっ放した。
ふしふしと煙を上げ、気絶しているツァイス。ついでにそこは場外。
『なんかこの試合こんなんばっかですが…ゴホン!とっ、とにかく!勝者、エージェントチーム!ついでにＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳの対戦相手、並盛風紀委員会が到着しましたので、このまま本日四試合目を行います!』
「げ。」
恐ろしい先輩達の気配に顔を青くする栄助であった。

ＲＯＵＮＤ１０　はばたけ！ＦＲＹＥＲＳ！

「さて、六道久、露払い、頼んでいいよね？」
「まわしませんよ、雲雀秀人。」
「だったら草壁副委員長に頼むことにするよ。」
　そういわれてリーゼントヘアーが特徴的な高校生、草壁達也がステージに上がるのを見て栄助はほっと胸をなで下ろした。
「よかったぜ、一勝はできそうだ。」
「相手さん、そんなにつえぇのか？」
「おっかない先輩だよ。さ、行ってくるか。」
　そういって栄助もステージに上がる。
「草壁先輩、容赦はしませんよ？」
「いつでも来い！」
『それでは始めェッ！』
「ブラックアウト！」
「うしろか！」

栄助の出現位置を予測し、草壁が後ろに振り向くが
「クロウバイツー!」
「ぐおっ!?」
打ち上げられる。そして栄助はそのまま…
「アイシクルドライブー!」
左手に氷の壁を構え、突撃して草壁を場外にたたき出した。
「ダラダラやってはいられねえ、どっちでもいいですよ!早く来て下さい!」
「では僕が行きましょう。」
そういって久は黒い棒を構える。
「少々棒術の心得がありますからね。行きますよ。」
そういって襲い掛かる久、しかし同じ高校に通う先輩と後輩だ。後輩は先輩の動きをよく見ている。故に…
「こっちは幻覚、本物は…そこだアッー!」
と、姿を隠して近付いてきた本物の久にワンインチを叩き込む。更にそのまま
「チェーンドライブー!」
「うっ!?」
「そらそらそらそらそらあっー!」

拳と蹴りが乱舞するがそれは龍虎乱舞のように決まった型があるわけではない。その場の状況と感覚によって組み合わせも力の入れ方も全く異なるまさに暴力と言うべき乱舞技だ。

「まだだぜ、」

次に胸倉を掴んで爆発を浴びせる。そして落ちてきたところに…

「でぁあっ!」

炎の籠もった右のハードブロウがクリーンヒット。そのまま落下地点の床面を凍らせる。

凍った床面を滑った久が場外に放り出されるやいなや秀人が栄助にトンファーを振り下ろそうとしている。

「早ツ!もう大将登場ッスか!?」

「速く終わらせたいんだろ?」

そうですね。と言いつつ、油断なく周囲に冷気を放出して、炎の出力を上げていき、最大限の緊張状態に持って行く。

相手はボンゴレ最強と謳われる雲雀恭弥の才能を受け継いだ男、雲雀秀人なのだから。

不備などあってはならない。

「っ!」
「くあっ」
　秀人が繰り出すトンファーの一撃を栄助は左手首に装着されるかたちで周囲の水分を凝結させた氷の刃で受け止める。しかし手数は相手の方が二倍。それも単純計算であり、実際の所恐らくその更に数倍の実力差だろう。
（このパワーに太刀打ちできんのはあいつ…レイズの暴走状態だけだ…あるいはカイルのダークラグナレク・エンプリオ…まあどっちにしろ）
「負けられねエっすからね!行くぜ!考えに考えたできたての技!まあ、某漫画のネタだったりするんだけど!?」
「面白そうだね、見せてくれよ。」
　言われなくても!と栄助は周囲の水分をスーツのように纏い始める。水分は冷気に触れたとたん凝結し、強固な防壁になる。
「名前も内容も、そのものズバリ、ホワイト・アルバム!」
　そして強烈な冷気を発しながら栄助が秀人に殴りかかる。
　しかし。
「甘いね。」
　と、秀人のトンファーが氷の防壁を破壊する。しかし壊れたのは防壁だけ。

「空蝉の術…ってね。行くぜ、ハイパー…」
秀人に腰の入ったハードブロウを叩き込み、軽く怯ませ、次の瞬間カチ上げるようにして右手を天高く掲げる。
「チェーンドライブ！」
それを一気に振り下ろし、自分の周りに火柱を立てる。
「ぐうう…」
「見えた！でりゃあああっ！」
火柱の中から突き抜けるように全身に炎を纏った栄助が現れ、渾身の右フックを放つ。
続けて左フック、クロウバイツとまるで最終決戦奥義、無式のような連撃を叩き込んだ。
そして纏った炎が消えたとたん、戦闘スタイルをがらりと変える。
「フリーズエグゼキューション！」
全身から今度は冷気を迸らせる。
（…？おかしい、凍るスピードが速い、体の自由が利かなすぎる…一体…まさか…！）
「気付いたようだな秀人先輩。さっきのハイパーチェーンドライブからの連打はこのための準備。俺は…」

と、芝居がかった動作で秀人を指さす。
「アンタに高熱を使って汗をかかせた!アンタの体は表面を覆う凍った汗で身動きが取れなくなっている!そして…」
と、今度は氷のカッターを造り出し、
「ちょい、ちょいっと。そんでもって…」
と、凍った汗の内、床面に接合しているものだけを選んで切り払う。
「そらよっ!」
ガン!と蹴りを出し、思いっきり滑らせると、その思惑通り場外に押し出せた。
「どーよ!この頭脳プレー!」
「フンッ。小細工しないと勝てないってことでしょ?」
『一回戦最後の通過チームはＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳに決まりました!二回戦は明日、執り行われますので、皆様ゆっくりと英気を養って下さい!』
・・・・・
「ッたくよォ…みんなしてなまっとるなまっとるって、そがな事もないと思うけどな、俺。」
「十分訛ってるよ。」
「ええっ!?そっそがな…いやツ、そんなことねえだろ!?」

「今めっちゃ否定したじゃん。」

ユウキとアイがいるのはセカンドサウスの隣町、サウスタウンのストリートギャングを束ねるサンズ・オブ・フェイトのアジトだ。

サンズ・オブ・フェイトのボスはストリートギャング達のキング、アルバ・メイラ。彼が「弟のチームメイトなら泊めてやらんわけにもいかんからな。」

と言って、二人部屋を貸してくれているのだ。

で、ユウキの悩み事はと言うと…

「訊ってねえっつーのに初対面の奴までンな事言いくさっ…いや、言いやがってちくしょ～…」

もっぱら自分の広島弁のことなのである。

「別にいいじゃん訛ってても、まあ、会話は困るかもしれないけど…」

「いい若者が広島弁なんか使うわけねえだろ?」

「そうやってムキになって隠すところがかわいかったりするんだけどね。」

その様子をドアの外で偶然聞いてしまったアルバは階段を降りていき、「どうしたんだよ兄貴?」と訊いてくるソワレに

「少し街の見回りをな。それに、若者達の恋路を邪魔しては犬に蹴られて死んでしまう。私にそういう趣味はないよ。」

と返して夜のサウスタウンに出て行った。
「ん?着信か…なにっ!?カイン・Ｒ・ハインラインが何者かに殺された!?しかも一月ほど前…一体何故今の今まで私の耳に入らなかったんだ!?クソッ!」
メール画面を閉じ素早くテンキーを押し、アルバは関係のある同業者に連絡を取る。その中にはボンゴレ十代目たる綱吉も含まれていた。
一頻り電話を終えると
「もうこんな時間か。そろそろ戻るか…しかし、インフェルノ・ファミリーとは一体…?」
と、アジトまでの道のりを歩いて行った。
「お帰り、兄貴。今、交代の奴らがでてったぜ。」
「ああ。しかし今回のＫＯＦも何かあるみたいだ。十分気をつけろ。」
「わかってるぜ、兄貴…」
と、二人がそんな風な話をしていると頭から湯気を出しながらアイがやってきた。
「まったくもー、反応するところはそこじゃないっての!」
「どうやら…」
「彼女との接し方を間違えたらしいな。」
事実、部屋で思いっきりはたかれた頬を抑えたユウキが

「ムキになってねーっつってのになんで叩くんだよ?」

と、ぼやいていたのだが。

ＲＯＵＮＤ１０＋　幕末浪漫…

「横浜じゃひっそり暮らすのは無理そうだな…」

そういってブラブラと歩いているのは金髪の男。

グレーに白のストライプの入った仕立てのいいスーツを着ているその男の名はジョット。後に沢田家康と名乗る事となる男だ。

時は１８７１年、楓とあかりが未来へと飛ばされてから一月が過ぎようとしていた。

結局あの科学者はイタリアに帰国し、楓達が戻ってくる方法はわからずじまいだった、そんなときのことだ。

異人の出入りの多い街、横浜。そこではボンゴレ一世としてそれなりに知れ渡った存在であるジョットが隠居することは難しい。

隠居と言ってもまだ２０代後半。事情を知らず、ただボンゴレのボスという所だけを知るものが見ればすぐに幕府の観察方が引っ捕らえに来るだろう。

それを避けるために旅装を整え、出発しようとするジョットの前に、一人の青年が現れた。

鮮やかな赤毛の剣士だ。着物の上からインバネスコートを羽織り、また、帯ではなく

ベルトを着用している。
「何者だ?」
「御名方守矢。ジョットとか言う男は貴様で間違いないな?」
やれやれ、とジョットは肩をすくめる。
「俺はまだここに来たばかりだし、何もやっていない。誰に雇われたにしろ、斬られるのはご免被りたいね。」
「なかなかこちらの言葉がうまいな。」
「そりゃどうも。で?何の用だ?」
「貴様を異国の権力ある人間と見込んで頼みがある。」
何?と思わず聞き返すジョットに守矢は続ける。
「ボヴィーノ、と言う男を知っているな?」
「ああ、イタリア人で、何でも時を越えるための研究をしているとか言う…あの人だろ?」
「その通りだ。」
「あの人を斬れってなら無理としか言えないね。俺と入れ違いに帰っちまったらしいし、そもそもお願いなんかせず、その剣で斬ればいい。雨月と同じか、それ以上の使い手みたいだからな。」

「雨月…天下無双と謳われた朝利雨月か。いや、斬れと言うのではない。」
　奴の研究の試作品を知っているか?と守矢は更に尋ねる。
「ああ、どれだけ未来に飛べるかも未知数だし、帰る方法もわからないと聞いている。」
「弟が、偶然被弾した。」
「っ!」
「だから…」
　そう言うと守矢は二振りの刀の内の一振りを腰から抜き、鞘ごと差し出す。
「この刀を預かっていてもらいたい。いつになるか分からんし、何代先の世に現れるかもわからんが、あいつが来たら渡してやってくれ。」
「…弟さんの名前は?」
「楓だ。」
「分かった。引き受けよう。」
　そう言ってジョットが刀を受け取り、
「それじゃあ、俺はもう少しひっそりと暮らせるところを探してそこに落ち着くことにしよう。じゃあな、御名方。」
「ジョット。」
　呼び止める声に立ち止まり、振り向かずに「なんだ?」と尋ねる。

「その刀、名は雪乙女。この、今俺が持っている月の桂が折れたときに妹の雪が贈ってくれた刀だ…。」

「そうか…その事、伝えておこう。」

ROUND11　楓の予感

「入りたまえ。」
「はっ！失礼します、ルガール・バーンシュタイン様！」
「で、なんだ？」
「KOFの二回戦進出者が決まりました。」
そうか。とルガールは頷いて下がってよろしい。と返す。
部下が退出していくと、かわって部屋に現れる二人の人影。カイン・R・ハインラインとアベルを殺した二人だ。
「どれ、キングオブファイターズの二回戦進出者が決まったか。」
「その名簿、我々にも見せてもらうぞ。」
「好きにしろ、私の見たい名前は見つけたさ。刹那、イェーガー、貴様らの知る名前も、あるやもしれぬ。」
「イェーガーそっちは全員代替わりを…ん!?」
「どうした？」
驚愕に刹那は一瞬だけ目を見開いたが、次の瞬間ククッ…と狂おしい笑いを漏らす。

「月華の剣士…蒼月楓…なるほど、常世に奴がいないのでどういう事かと思えば…ククククッ…何らかの方法で時を越えていたとは…しかも一条あかり…あの御名方守矢との楽しい時を邪魔した陰陽師…いいだろう…ここまで上ってきたとき、貴様らの命、刈り取ってくれよう…」

刹那の横顔を稲光が照らす。その顔は端正にもかかわらず、引き攣ったように顔を斜めに横切る刀傷もあいまったかなり禍々しいものだった。

・・・・・・

「激しい雷雨に伴い、二回戦は延期…か。」

「雨ふっとるから外にも出られへんし、なんか退屈やな～」

綱吉に呼ばれ、部屋から武が出て行ったので今、月華の剣士チームの部屋にいるのは楓とあかりだけだ。

「楓～、なんかおもろい事ないかなあ?」

「そもそも英語はよく分かりませんから、何言ってるかもわかりませんし、これじゃ露店も休みですよ。」

やよなー。とふてくされた顔で言うと、ならば!とばかりに楓にしがみついた。

「何やってるんですかあかりさん!」

「退屈なんやもん、なんか遊んでくれてもええやないの!」

「よくありま…せ…ん!?これは!」
「どないしたん?」
「まさか…いや、でも間違いない…地獄門の気…開いてるわけじゃないみたいだけど、誰かが扉に手をかけているような感覚だ…」
「なんやてえ!?」

ＲＯＵＮＤ１２　燃える鳳凰

「見せてやる、草薙の拳を！」
「そこだ！」
　京が最終決戦奥義無式を放つとその突撃タイミングに合わせて楓が突きを叩き込む。
「ぐえっ！」
「活殺、乱れ雪月華！」
　楓がそのまま何度も円を描くようにして木刀を振るう。
「ぐはあっ！」
「そこだぜ、活心最終奥義ィ！」
　活心最終奥義、蒼龍。天へと昇る雷の龍のような一撃で京を高く高く突き上げ、
「落下が…見え見えなんだよォォ！」
　と、そのまま場外にたたき落とす。
『決まったア！二回戦最初の通過チームは月華の剣士チームだ！同時進行のＴＨＥ　ＦＲＹＥＲＳ対あさり一家は…』
「テメエも逝っちまえ！」

「その前にテメエが逝っちまえ！」
　レイズが右腕を巨大な銃口に変形させるとそこから砲撃を放とうとする。しかしそこに弘がダイナマイトを投げ込み、銃口内部で大爆発を引き起こした。
「あ…うぁ…」
『こちらはあさり一家の勝利！続いての試合はＭＡＲＫ　ＯＦ　ＷＯＬＶＥＳ対ライバルチーム、エージェントチーム対新三種の神器チームだ！』
「いち、にっ、勝負です！」
　先鋒としてステージに上がったのはテコンドー界の至宝、キム・ジェイフンだ。
　対するはアンディ・ボガード。
「行くぞ、斬影拳！」
　肘打ちの姿勢から滑るように突撃するがそれをジェイフンは片足で受け止め、そのまま
「灼火襲！」
　六連続の蹴りを放つ。少年時代から炎の如き足技と謳われた彼の生命線とも言える切り返し技だ。
「半月斬！」
　更にそこから重心移動をしながらのタックル。そのまま体を一回転させて踵落とし

を見舞う。
「うおおっ!?」
「そこだ！飛燕斬！」
ジェイフンはたじろぐアンディに切れ味鋭いサマーソルトキックを叩き込む。
そしてアンディよりも先に着地すると右足を高く掲げて待機。ちょうど踵が届く範囲まで来たところで
「鳳凰！」
と言いながら踵落としを叩き込む。そして更に
「天翔ォォォ脚！」
炎が見えるほど凄まじいサマーソルトキック。
落ちてくるアンディに更に容赦せずキム一門の十八番を繰り出す。
「行きます！」
落下点へ向けて突撃、落ちてくるアンディに向けて
「あたたたたたたァ!!」
と、鮮やかに舞うような動きで蹴りの連打を叩き込む。そして何度も何度も後旋腿を決めてアンディを浮かすと
「鳳凰きゃぁく！」

思い切りの踵落としを叩き込んだ。
「がはあっ！」
アンディが場外の地面に叩き付けられ、苦悶の声を上げる。
「おしっ！わいに任せとき！」
ライバルチームの二番手はロバートだ。
「飛燕疾風脚！」
得意の蹴りでジェイフンに近付くと「幻影脚！」「龍斬翔！」「九頭竜閃！」と、次から次へと技を繰り出す。
「まだですよ！」
「なんやてえ!?」
「ゼロ距離鳳凰脚！」
蹴りを喰らいながらの至近距離から逆に蹴りの連打。鳳凰が見えるようなサマーソルトを決めるとそのままロバートの落下点より向こうに移る。
「零式鳳凰脚！」
そしてもといた方向に蹴るや否やそちらに移ってもう一撃とロバートの周囲を素早く移動しながら蹴りを入れていく。
「はあああ…」

ズザァッ…と砂煙を巻き揚げながら踵を上げて飛び上がり…
「あたぁっ！」
ズドォン！渾身の踵落としを見舞う。しかし頭部に全力の踵落としを受けてもロバートは倒れない。
「いったたた…けどまだやで、そりゃぁ！」
ダァン！踵落としに使った足をつかんで首切り投げ、続いて起き上がったところへ
「極限流奥義！そりゃそりゃそりゃぁっ！どないや！」
龍虎乱舞を喰らわせる。シメのアッパーカットで体力の限界が来たらしいジェイフンは意識を手放した。
「ご苦労様。さ、次は私が相手です、手加減無しできて下さいね？」
「あ…っと…キムさん？双葉さん？もうめんどくさいからほたるちゃんでええか。旦那さんが負けたからゆうてなんか怖いオーラださんといてもらえるか？」
「私そんなオーラ出してませんよ？いきますね？」
「いやっ、あのっ、ちょっ！」
「双掌…天蓮華！」
ズガガガガガガッ！ドガアン！掌底の連発からの全力の踵落とし。
「あだだだ…ことあるごとにユリちゃんからちょうアッパーくらっとるけどそのわい

をしてボロボロとしか言いようがないわ。ま、負けへんけどな！」
もはや砂埃で茶色くなった黒髪を掻き上げると両手を弾いて構えをとる。
「覇王！」
「させない！」
「かかりおった！はっ！」
覇王翔吼拳と見せかけ、潰しに来たほたるに向けて掌底突きを放つ。
「きゃっ！」
「今度こそ覇王翔吼拳や！」
改めて放たれた覇王翔吼拳が直撃し、ほたるは体力をごっそり持って行かれる。
「きゃあああああっ！」
「どないや？」
「まだ…ですっ！」
「おわあああああっ!?」
ロバートの顔が驚愕に染まる。土壇場でほたるは見よう見まねではあるが鳳凰脚を放ったのだ。
「はあああああああっ！」
蹴りの連打からの…

「そぉれっ！」

ハイキック。続けてそのまま双掌天蓮華につなげ、ロバートは倒れた。

「はぁッ、はぁッ、はぁッ…ふぅ…やりました…二階堂さん？やれるだけやらせてもらいますよ？」

「なんかやりにくいけど…まっ！しょうがないか。それに俺、どんなにかわいくても人妻には興味ないからさ。」

言うが早いか紅丸が閃光の尾を引いて駆け出す。

「俺について…」

バチィィィッ！強烈な電撃がほたるの体を駆け巡り、動きを硬直させる。

「来れるかい!?」

「ぐっ…」

「決まったな。へやッ！はっ！」

小さく跳んで繰り出すジャックナイフキックからの居合い蹴り、そこから反動三段蹴り、紅丸ランサーと華麗に技をつなげていき、瞬く間にほたるを場外に出す。

「本気で行くぜ？」

「こっちこそ！行くぜ、ロック・ハワード！ジャックナイフキック！」

「ハードエッジ！」

ごっ！紅丸の蹴りとロックの左肘がぶつかり合う。
「シャインナックル！」
「なにいっ!?」
そこから更にロックはフリーの右拳で正拳突きを放つ。
「せいっ！」
続けて左肘で顎をカチ上げ、すくい上げるようなショルダータックルに持って行く。
「ライジングタックル！」
そのまま逆立ち、錐揉み回転しながら上昇していく。
更に着地してのダブル烈風拳、そこから続けてレイジングストーム。
「がはあああっ！参ったな。俺の負けだ…」
「へへっ！どうだ?俺達世代も伊達じゃねエだろ?」
『ＭＡＲＫ　ＯＦ　ＷＯＬＶＥＳの勝利！一方エージェントチームと三種の神器チームは…』
「バスターウルフ！からの…大蛇薙だ！」
「バリいてエ…！」
明人の連続技の前にユウキが倒れたタイミングだった。
『こちらは新三種の神器チームの勝利だ！』

「ごめん、アイ、負けちまった…」
「気にしないでよ、怪我なかったんだし、それに…頑張ってるトコ、横から見てて…格好良かったよ?」
「ええっ!?」
ねぎらいからいきなりの告白。ユウキが激しく動揺する。
「とっ!とりあえず、裏方に回って調べてみようぜ!」
と、早口で言って顔を背けるがその後ポツリと
「そりゃ…俺も…だけど…」
と呟く。
端で見ていたソワレは
「お邪魔だとは思うがね、兄貴の所に協力してくれねえ?俺、店あるから戻んねえといけねえし。」
「はい、そうさせてもらいます!」
「べっ、別に俺も構いませんよ。」
「助かったぜ、サンキューな。」

ＲＯＵＮＤ１３　そっくりさん!?楓対ロック!

「いよいよ三回戦か…」
「相手はまーくおぶうるぶすちーむっちゅーやっちゃな。」
　ホテルの部屋で三回戦の準備をしている楓とあかりは対戦相手であるＭＡＲＫ　ＯＦ　ＷＯＬＶＥＳについて話していた。
「武さん、何か知ってます?」
「ああ、リーダーのロックは父親譲りのセンスで強力な必殺技を次から次へと物にしていった、まあ、所謂格闘技の天才だな。ジェイフンはテコンドーっつう韓国の武術の達人だな。親父のキム・カッファンから教わったらしいぜ。巷じゃあ龍ですらあいつのまえではトカゲ同然だとか言われてるな。もう一人のキム・ほたるって人はジェイフンの嫁さんで彼女自身中国拳法の使い手だな。みんなかなりの実力者だ。正直言って厳しいと思うぜ。」
「と、すると…鍵になるのは僕の…」
「青龍の力やな。」
・・・・・・

「さて、と。木刀、よし。靴も特に破損してる様子はないし、部屋の鍵も持った。服装も問題なし。」

ホテルのロビーで準備ができているか確認している楓に綱吉が話しかけてきた。

「楓君に渡しておきたい物があるんだ。」

「渡しておきたい物？」

はい。と綱吉が差し出したのは長い包み。

「何でも日本に渡ったばかりの一世が預かった物らしいんだ。」

「はあ…これは…刀!?一体誰がこれを!?」

「赤毛の剣士…って聞いてるけど。」

その特徴を聞いて楓の脳裏に一人の男の姿が浮かぶ。

かつては殺したいほどに憎んだが今では懐かしさすら感じる。あまり多くを語らず、横着なほどに無口な男。

「兄さん…ありがとう。ありがたく受け取らせてもらうよ。」

少しだけ抜いてみると刀身の根本に銘が彫ってある。

「雪乙女…姉さんが兄さんに贈った刀…」

・・・・・

「まずは、わたしがいきます！」

「ほな、うちがあいてになるで!」
　準決勝第一試合。新三種の神器チーム対あさり一家の試合と並行して行われている月華チーム対ＭＡＲＫ　ＯＦ　ＷＯＬＶＥＳだ。先鋒同士の第一ラウンドはあかり対ほたるだ。
「はいっ!はっ!たあっ!」
「うわあっ!ひゃあ!ひょえええっ!?」
　素早く流れるような連撃を繰り出すほたるに対し、防戦一方のあかりである。しかし
「あーもー!もー我慢できへん!一条流陰陽術、いくでえ!」
　と、印を結んで炎を繰り出す。
「えええっ!?」
　と、ほたるがたじろいだ瞬間続けて
「一条流陰陽術、あかりスペシャル!いくでえ…百鬼夜行やあ!」
　大量のお札をウエストポーチから取り出してばらまくとそれらが全て大量の式神になる。
「六合、のしてんか。」
　頭を差し出したむかでのような式神、六合の頭に乗るとあかりは号令を下す。
「いっけえー!」

そして大量の式神がほたるに襲い掛かった。
「えっ!?えっ!?」
しかし全員が殴る蹴るの暴行を加えるわけではない。
以前はこの様な回避策をとらなかったためにあかりまでが巻き添えになっていたが…相手に気付かないまま突進する式神達がそのままほたるを踏んづけているのだ。
「いったたたあ…もう…こうなったら…」
「ちょっ!?ほたるさん!?あれをやるの!?」
ステージの外からジェイフンが慌てているが聞く耳を持たず、ほたるは思い切り飛び上がり、あかりに蹴りを叩き込む。
「ぎゃっ!」
「天翔…乱姫!」
蹴りを叩き込み、少しだけ浮かせると六合の頭部に押さえ込み、両手で気功を注ぎ込む。
「ふう…」
「ま…まだやで!雷神!」
再びお札を使い、今度は雷神を呼び出す。
「今回はおちゃらけ無しや…まだうちは…楓と同じ土俵には立ててへんねや!せやから

こんな所で終われへん!雷神!すうぱあらっしゅや!」
　ぐがあああああああ!と言う雄叫びを上げて雷神が両の拳を次々に繰り出していく。
　ドコドコドコドコドコドコドコドコ!!!!!!!!!!
「きゃあああああっ!」
　ドキュゥーン!高速ラッシュによって拭き飛ばされたほたるが場外に落ちたのを確認すると
「これで…ちょっとは楓に…近づけた…かな…?」
　どさっ…六合の頭の上であかりが倒れ術者が倒れたことで六合もまた雷神共々消える。
「あぶないっ!」
　咄嗟に駆け出した楓は覚醒して身体能力を一気に跳ね上げ、地面に落ちる直前にあかりを抱き留めた。
「かえ…で…」
「しゃべんな!大人しく寝てろ!ボロボロのお前が必死になってるのなんてもう見たくねえ!」
「うん…分かった…スゥ…」

「ッたく…幸せそうに眠ってやがる。おい武！気張っていけよ！」
「おう！」
　ステージに上がっていく武を見送り、楓は覚醒状態をとくとポツリと
「僕は…あなたのことが…ですよ、あかりさん。」
　と呟いた。
「全力で、勝負です！」
「こっちこそ、本気で行くぜ！」
「流星らぁく！」
「篠突く雨！」
「半月斬！」
「五風十雨！」
　ジェイフンの呼吸に合わせて武は攻撃を躱し、続けて
「逆巻く雨！」
　と、高く高く巻き上げる。
「いくぜ、雨雲返し！」
「あまいっ！鳳凰天舞脚！」
　空中から鳳凰脚の構えで突撃するとジェイフンはそのまま空中三撃を放ち、回し蹴り

から着地しての蹴りの連打。
　あたたたたたたたたた!と連打を加えていくと次に後旋腿でどんどん上昇していき、
「あたあっ!」
　踵落としを決める。
　しかし場外に落ちながらも武は
「時雨蒼燕流、総集奥義、時雨之化!」
　と超高純度の雨の炎を放つ。
「うっ!?うごきが!?」
「雨の炎の特徴は沈静…アンタは今体を動かすことができなくなっている。一緒に場外まで行こうぜ。」
「くっ…」
　そして二人はそのまま場外へ。
「随分と面白そうだな、あいつら。俄然楽しくなってきたぜ。」
「楽しんでもいられませんよ?ロックさん?」
「あかりさん、行ってきます。」
「彼女のことは俺が見ててやる、全力で行ってこい!」

仲間の応援を背に受けてステージにロックと楓が立ち、にらみ合う。
「お互いにもう後がない…最高だな。このヒリヒリするような感覚…」
「負の感情の全くない真剣勝負…この心地よい緊張感…」
ロックはファイティングポーズをとり、楓も覚醒する。
「「おもしれえ！全力全開で勝負だ！」」
先ずは互いに飛び道具を放つ。そしてそこから
「連刃斬！」
「クラックカウンター！」
「空牙ァ！」
「ダンク！」
と、互角の技の応酬が繰り広げられる。
「おもしれえ、これだから格闘家はやめられないんだ！」
「最高だぜ、アンタ！」
ロックが受け、楓が打ち掛かり、それを流してカウンターの一撃を放てば更にそれに返し…
いつ終わるともしれない技のラリー。しかしそれに変化が起こる。
最初に変化を起こしたのはロックだ。

「デッドリーレイブ!」
　拳と蹴りを乱舞させるロックの十八番。次々に技が決められていく中で楓はあるチャンスを待つ。
　そして…
「ここだ!」
　最後の気を込めた一撃を放つその一瞬!
「十六夜月華!」
　連続切りが綺麗に決まる。つづけてそのまま守矢であれば低い位置への斬撃を繰り出すところ、楓は蒼龍の始動に入る。
「覚悟しな?活心最終奥義ィ!」
「があああああっ!」
　思い切り振り上げた木刀がロックの顎を打ち、思い切り吹っ飛ばした。
「まだだぜ、もっと見せてやるよ、俺の本気を!」
　更に地面に木刀を突き立て、雷の龍を放つ。
　それがロックの体を連続して直撃し、ロックは崩れ落ちた。
「う…」
『気絶!勝者は楓選手!よって決勝戦は新三種の神器チーム対月華の剣士チームだ!』

ＲＯＵＮＤ１４　本戦終了！そして…

「あっちゃあ～…場外か…」
「アンタと一緒に落ちるしかありませんよ…」
『さあ白熱する決勝戦、実力差は戦略でカバーとばかりに先鋒の二階堂優作、山本武を紅丸コレダーでつかんだままで場外に道連れにしたあ！』
「すまねえな…後は頼むぜあかりちゃん。」
「おーけー！任しとき！」
「よろしく頼むぜ八神さん？」
「大丈夫…たぶん。」
　決勝戦第二ラウンドはあかり対夕子。二人はステージに上るや否や
「百八式、闇払い！」
「一条流陰陽術や！」
　と、互いに炎をぶつけ合う。
「葵花！」
「ぎゃっ!?」

「ふっ、はっ！」
　得意の二連ショートアッパーからの叩き付けで優位に立つとそのまま両手を顔の前に持って行く。
「禁千弐百拾壱式、八稚女！」
　そして十八番まで持って行く。
「いいから！私の！邪魔をしないで！」
　打撃の乱舞をまともに受けたところへ赤紫の炎を使った爆発。超一流の陰陽師であるあかりといえど、その流れに体力をごっそりと持って行かれる。
「くうう…」
「闇削ぎ！」
　追い打ちで２つの短射程の炎を使い、巻き上げておいて仕上げに火柱。場外に飛ばすためにあるような技を受けてやはりあかりは場外に飛び出す。
「ごめん…楓、負けてしもた…」
「いえ、よく頑張りました、後は任せて下さい。」
「うん…」
　ステージに上りながら楓は思い出したようにあ、そうそうといって肩越しに振り返る。

「僕はあなたのこと、好きですよ。」
「え!?」
「じゃ、勝ってきます!」
そういって一足飛びに階段を駆け上がると覚醒しながらステージに飛び込む。
「さてと、はじめるかい?」
「ええ。」
「禁千弐百拾壱式、八稚女!」
素早く、オマケに姿勢も低くして近付く夕子、ここまで失敗した試しのなかったこの技だが…
「十六夜月華!」
軌道が変えられないというほとんど唯一の欠点を利用され、逆に連撃を喰らう。
「くっ…やあッ!」
「うおッ!?」
ガキィン!咄嗟に反撃した夕子の拳が木刀の腹を打って動きを止めた。
「今だ!百式…」
「無刀、掌打!」
ドムッ!鬼焼きの体勢に入った夕子のボディにフリーの左手による掌底突きが突き

刺さる。続けて
「乱れ雪月華!」
　円を描いて攻撃するこの技で夕子を場外にたたき出した。
「最後は…俺が相手だ。手加減しませんよ、先生。」
「こっちこそ、生徒だからって手は抜かない。本気で行くぜ?」
　そして…ＫＯＦ最後の戦いが幕を開けた。
「ぶっつけ本番だがしょうがねえ!未完、最終決戦奥義!」
「連刃斬!」
「無式!」
　火柱をぶち上げ、その中を突っ切った明人が荒咬みを繰り出す。
　それに対して得意の連続技で返そうと試みる楓だったが…
　バキィッ!?
「へ!?嘘ッ!?喰らう前に木刀が…」
「見せてやる、草薙の拳をぉぉぉッ!」
「折れたアアアアアアアアアアアっ!?」
　ドンドンドンドン!四連続の荒咬みを放ち、明人は疲労してしゃがみ込む。一方の楓は場外にたたき出されてしまった。

「夕子、お前のお陰だ。助かったぜ…」
　ステージ上から夕子に向けて感謝の言葉を贈る明人。楓の木刀にとどめを刺したのは夕子が反撃したときの一撃だったのだ。
「なんやえらいあっけない幕切れやったなあ。」
「ま、そんなモンだろ、世の中。」
・・・・・・
　キィンッ!ギャリィッ!ガキン!白刃がぶつかり合う音がビルの廊下に響く。
「これ以上地獄門を開けさせはしない!四神が一人いれば閉じられる今のうちに貴様を倒して門を閉じさせてもらう!」
「随分と威勢がいいな、朱雀の嘉神慎之介!」
　今やルガール達の本拠地として機能しているカイン・R・ハインラインのビル。その廊下で戦っているのは刹那と、今し方少しだけ開いた地獄門から這い出してきて、その門を閉めようとしている朱雀の守護神嘉神慎之介だ。
「うおおおおっ!」
「遅い!」
　ザンッ!ぼとっ。慎之介の右腕が落とされた。
「ぐあああああああああああああああああっっっ!!!!!」

「苦しいか?心配するな…ククク…すぐにそんな苦しみからも解放されるのだ…」
「まだ…だ…!」
朱雀は炎の力を持つ。慎之介はその力を用いて左手に青白い炎を宿した。
「まだ、負けた訳ではない!世界と比べれば、たかだか死人の腕の一本、安い物!」
「フンッ!見苦しいぞ!」
炎を纏った左拳を刹那に叩き込もうと、一気に踏み込む。刹那もまた黒い雷を黒い刀身に載せて踏み込む。
「……え…?」
呆然とした慎之介。彼の視界は下半分が真っ赤になっていた。
呆然としたまま自分の胸を見てみると、横一文字に斬られている。
「く…き…さ…ま…ア……」
「だから言っただろう?遅いと。」
「……」
「死んだか。ルガール、主催者が直々に会いたいといっている。そういって奴らを通せ!」
『そろそろ我々の出番という訳だな。退屈すぎてあくびが出ていたが、それも終わりか。』

・・・・・・

「新三種の神器チームの皆さんですね？主催者がお会いしたいといっております。我々についてきていただけますか？」

表彰式も終わり、優勝、新三種の神器チーム、準優勝、月華の剣士チーム、三位、あさり一家という結果が発表された。

「主催者か…俺、そういう地位のある人と会うの、なんか気が引けるんだよな…佳久達や楓先生達も来てくれよ。」

「分かったよ。」

「ああ、僕もいいが、ちょっと荷物をとってくるよ。」

「では、他の皆さんはこちらへ…」

ＲＯＵＮＤ１５　邪魔をするな!

「荷物は…あった!疾風丸も雪乙女も…大丈夫みたいだ。さて、出てきたらどうだ?さっきから後ろで様子を覗っていたろ?」

控え室、今は楓一人しかいないその部屋の中で楓は後ろを向いたままで廊下に向けて呼びかけた。ちなみに控え室に入る少し前くらいからすでに覚醒している。

「ヒヒヒッ…」

現れたのは異形。包帯で目と鼻と口をのぞく頭部全てを多い、来ている物はボロボロ。辛うじて和服だと分かるような服装のそれが出刃包丁のような武器を二振り携えて楓を見据え、笑う。その体はまるで腐乱死体のようだが、楓はその声に聞き覚えがあった。

「その声、お前は…たしか紫鏡。殺人狂の元新撰組隊士か…地獄門がわずかに開いてるんで、這い出してきたのか?」

「ご名答…所でさ…イィィ刀だなぁ…それ…頂戴?ヒヒッ…」

「お前、ホントに人間か?」

「知りたい?教えてあげない…それよりさあ、その刀、寄越せよ、両方…」

「持ってどうする？」
「いいから寄越せッつってんだろうが…俺はその刀で…今度こそあいつに勝つんだ！」
「…せエよ…」
紫鏡の絶叫を聞いた楓はしかし静かに呟く。
「あ？」
「るせエっつってんだよ…」
「なんだって？」
「だから…」
「よく聞こえねえよ！」
「うるせエって言ってるだろオが！」
ザァンッ！紫鏡の体が４つになり、声もなく崩れ落ちる。
「俺の感が正しけりゃ、みんながやべエ、いそがねえと！」
楓が本戦会場から駆け出すと、近くにあったビルの最上階から紅蓮の炎が見える。
「ありゃ、明人の…クソッ！」
間に合え！
・・・・・
「三対一とは少しばかり我々の品位を下げる気もするが…まあ良い。三種の神器の子供

達よ。私を恨むのではなく、貴様らの親を恨むんだぞ?」

　明人達新三種の神器チームの前でルガールが悠然とした態度で両手に髑髏のかたちをした力を宿す。

「俺は…復讐者…バミューダの輝きと共にボンゴレに復讐する者…」

　宏人を軽く殴り飛ばしたイェーガーはただ淡々と自分の戦う理由について述べていく。

「さて、と…あのとき楓と共にいた陰陽師に…イェーガーの復讐相手、山本武か…相手としては悪くない、御名方守矢ほどではないにしろ、楽しい時間が過ごせそうだな…?」

「刹那…やっぱりアンタの仕業やったんか…あのまま地獄門の向こうでねむっとればええものを…」

「さあ、俺を…楽しませてみろ!」

「烈風拳!」

「死ね…」

・・・・・

「クソッ!なんなんだあのオッサン!」

　明人が毒突き、隣にいる夕子も

「あいつの力、オロチの物だわ。一体何故…」

と、疑問を呈する中で優作が一人冷静に
「あいつはルガール・バーンシュタイン。今は世界有数の総合企業として有名なバーンシュタイン商会の創設者だ。当時はブラックマーケティングを牛耳る死の商人だったそうだがな。来るぞ！」
「カイザーウェイブ！」
「うおあっ!?クソッ、うざってえな、あの飛び道具さえどうにかなれば…」
・・・・・・
「そこだ…」
「させるか！」
イェーガーが弘に向けてはなった鎖を吉久が自分の左手を犠牲にして止める。
「若大将、左手が…」
「大丈夫、ただ皮膚の部分を貫通してるだけだ。それより今だ！」
「はいッ！ロケットボム！」
吉久が鎖を引っ張ってイェーガーの動きを封じ、そこに弘がロケットボムを投げ込む。
爆発の煙の中にイェーガーが隠れ、鎖もたるんだのでもういいだろうと吉久が鎖を引き抜いた瞬間…

「効かんな。」
　何事もなかったかのように平然とイエーガーが煙の中から現れた。
「そ…そんな…」
・・・・・・
「十階建てなんて高すぎだろ!三分近く階段登ってンのにまだ八階だぞ!」
　などとぼやきつつも階段を上っているとあっという間に九階も通過。
　楓は十階までを五分で登り切り、廊下に足を踏み込んだ。と、次の瞬間黒い刀身が眼前を通り過ぎる。
「やっぱてめえか刹那!」
「貴様こそ、やはり紫鏡如きでは倒せなかったようだな。あの二人には少しだけ眠ってもらった。目の前で貴様が死ぬ様を見せ、絶望させてから殺すためにな!」
「テメエこそ、さっさと生まれた場所に帰れ!!」

ＲＯＵＮＤ１６　門を閉ざせ！

「うあああああああああああああああっっ!!!」
「優作！クソッ、テメエ！これでも喰らえ！」
　カイザーウェイブを喰らい、優作が倒れるのを目にした明人はカッと頭に血を上らせ、大蛇薙を放った。
「フンッ。下らんな。ジェノサイドカッター！」
「ぐはっ！」
　大蛇薙ぎを簡単に掻き消されたばかりか足を振り抜く勢いで真空波を発生、明人に攻撃までして見せたのだ。
「くっ…」
「今の神器とはこの程度なのか？随分と落ちぶれたものだな。ならばこれで終わりと…」
「終わるのはあなたよ！」
「夕子!?」
　ざっくりと裂けた左肩を押さえながら明人は驚きの声を上げる。

「私の大切な人を傷つけたことを悔いて!詫びなさい!あなたの命で…」
「その程度か!全く話にならんわ!」
「え・・・っ!」
　夕子の乱舞に無理矢理割り込んだルガールはそのまま壁まで彼女を持って行き、叩き付ける。
「さて…まずは貴様から…」
「…っ!!!」
「怖いか?フン。やはり子供だな。」
　そういいながら彼は蹲った夕子に蹴りを入れる。何度も、何度も。
「やめろ…」
「フンッ!」
「やめろって言ってンだろ…」
「ゲフッ!」
　明人の体が赤く輝きはじめる。それが怒りによる物なのか、他の何かによる物なのかは分からないが。
　とにかく、わき上がる怒りに身を焦がしながら明人が吼えた。
「やめろって言ってンだろうが!」

くるりと振り向いたルガールは少しだけ感心したような顔をして
「フン。草薙が八神の危機に怒りを燃やす…か。下らんな。宿敵が死んで嬉しいのが普通ではないのか?」
「う…」
足下でもはや意識もなくうめいているだけの夕子をちらりと見やってから再び明人の方を向く。
「ならばせめてもの情けだ。二人まとめて殺してやろう!」
「やってみろ!」
「デッドエンドスクリーマー!」
ルガールが明人の懐に飛び込み、体に手刀を突き立てようとした瞬間、明人の体を赤く輝かせていた正体が分かった。
「何ッ!?」
「これは…俺の体全体から…炎が…すげエ熱さだ、さっきまでとは比べものにならねえ…燃える…燃える…燃えるぜ…!」
「糞ガキがアアアアッ!」
「随分と荒っぽくなったなオッサンよ!見せてやるぜ!これが俺の!」
抉り込むようにして鳳燐をぶち込み、そのまま裏拳によるアッパーカット。そこから

荒咬み四回、毒咬み四回、罪詠み四回からの罰読み四回。
「草薙の拳だアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」
罰読みのまま飛び上がっての鬼焼き。さらにそこから大蛇薙とつないでルガールの全身を炎で覆い尽くす。
「ぐがががが…この私が…こんなガキに…」
「見苦しいぜ!大人しく燃えちまえ!」
とどめにもう一撃大蛇薙ぎを放ち、ルガールの体を骨も残らぬほどに焼き尽くした。
「や…やったぜ…夕子…無事か…?」
体全体を覆っていた炎がなくなったとたんに疲労がドッと襲い掛かり、明人は荒い息をついて俯せに倒れる。
「ぁ…明人…」
「よかった…無事みたいだな…」
這いつくばって、意識が朦朧とする中で夕子の倒れているところまで這っていく。
「本当に…よかっ……」
明人は力尽き、意識を手放す直前に駆け込んでくる人影を見た。
「・・・!・・・!」
何を言っているのかは聞き取れない。明人はそのまま意識を失ってしまった。

・・・・・・

ジャラララッ！鎖が走り、吉久を直撃する。

「ぐああっ!!……ぅぁ…」

「若大将！」

「他愛もない。ボンゴレの十一代目はこんなものなのか？」

宏人はすでに気絶している。吉久も軽く意識を失いかけている。

「さて…残るは貴様一人…嵐の守護者、獄寺弘。今ここで死ね！」

「あ・・・あ・・」

「巫山戯るな…俺のファミリーを殺すなんて、させてたまるかよ！」

意識をつなぎ止め、立ち上がりながら吼える。

「いいだろう、ならばそれを見ることのないよう、貴様から殺してやる。」

（とはいえ…あいつとの実力差は…実際ヤベエ。けど、この様子は絶対見てるはずだ…）

吉久の左頬を冷や汗が伝い落ちる。ドライバーズグローブに炎を灯し、構えをとるがどこか小さく固まっているように見える。

「貴様、震えているようだが、本当に戦えるのか？」

「うるせえ！震えてる訳じゃねエ！ダメージでふらついてるだけだ！」

「ならば動くな。すぐ楽にしてやる」

「そんなわけにいくかよ。ダメージあるからっつって、ファミリーの危険に手ェ出さずにいられるかよ!」

グローブの炎が大きく猛りあがり、覚悟の強さを見せつける。その瞬間、隣のビルの屋上できらりと何かが光を放った。

・・・・・・

「言うじゃねエか、クソガキ…」

「どう?俺の息子も捨てたモンじゃないでしょ?」

スーツ姿の赤ん坊がスナイパースコープを覗き込んでニヤリと笑う。

その隣に立ち、ビル風を受ける綱吉の髪が靡く。その髪を抑えながら綱吉は双眼鏡をおろし、赤ん坊に問いかける。

「どうする?リボーン?」

「しょうがねえ、手エ貸してやるか…」

スナイパーライフルの引き金に指をかけたリボーンがその指を引き絞る。

「いってこいよ。」

「がんばれ、吉久。」

・・・・・・

ダァン!

額から血を吹き出して吉久がもんどり打つ。
「何ッ!?若大将!」
「む…今のは…」
イェーガーが隣のビルの屋上を見やる。
「沢田綱吉…」
その視線の先でリボーンがライフルを上げ、綱吉がしっかりとこちらを見据えている。
その二人の唇が動く。二人同時にニヤリと笑い
「イッツ死ぬ気タイム」
と言った。それを読み取ったイェーガーがバッと吉久の方に視線を戻すと吉久の体に亀裂が入る。
「死を全身で覚悟したか…面白い…その力を潰してこそ復讐たり得るのだからな…」
亀裂に手をかけ、ゆっくりと体の中から脱皮するように吉久が現れる。
「復活(リボーン)。死ぬ気でお前を倒し、みんなを守ってやる。」
「来い。」
行くぞ!と、吉久が全身から大空の炎を出して突撃をかける。
「ウォラァ!」

「ぐはっ!?」
　ゴギャッ!バギィッ!ドスッ!ボグゥッ!一方的に吉久がイェーガーをタコ殴りにしていく。
「ぐうッ!?バカなっ!こんなパワーアップ!」
「成長期舐めんじゃねエ!」
　ボウッ!ガギャアッ!渾身のサマーソルト。そしてそのまま追いかけ、掴む。
「そぉーれっ!」
　そのままジャイアントスイングの要領でぐるぐるとブン回し、壁に向けて投げつける。
　ドゴォン!
「ガハッ…!」
「終わりだ!ＸＩ（ウンディエーチ・フィアンマ）の炎!」
　ボウッ!ドアッ!両の拳に炎をチャージ、猛烈な勢いで放出する。
　十発の炎の弾丸がイェーガーの体を穿つ。
「ぐあああああああああああああああああああああああああああっっっ!」
　ゴギャァァァッ!!全身から両手に炎を集め、一気にそれを放出したそれが思い切りイェーガーに叩き付けられる。

全身がコンクリートと調和し、風化、砕け散るイェーガー。
「ハァ、ハァ、ハァ…どうにか、なったか…って・・・へ？外!?落ち…」
いつの間にやら外に出ていた上に両手から炎を放った反動でビルから離れてしまった吉久。あわや彼の命もここまでかと思われた時、
隣のビルから飛び出してきた影が一つ。
「と…父さん?」
「よく頑張った!」
「ったく…見てたんなら早く出て来いよ…」
・・・・・
「連刃斬!」
「雷神すうぱあらっしゅ!」
雷神の巨大な拳が刹那に襲い掛かり、その中を縫うようにして楓の疾風丸が綺麗な弧を描いて空気を裂く。
しかし雷神の拳を軽やかに買わしながら刹那の黒い刀が疾風丸を受け止める。
「るあああああああぁぁっ!!!」
強引に楓の一太刀を払いのけ、続いて渾身の一太刀を入れようと黒い雷を全身に纏って振り下ろす。

「今ここで…終われ！」
「終わってたまるか！」
　ガキイイイッ！
　咄嗟に鞘で受け止め、雷を雷で防ぐ。
「フフフフ…やはり楽しい…こんな方法で防ぐとは…やはり御名方守矢の弟だな…」
「か…関係…ねえだろ！」
　ギリギリと押し込まれる刃を必死で押し返しながら言い返す。
「それもそうか…だが、もういい加減飽きた…」
「ぐうう…」
　刹那の刀に力がこもる。よりいっそう力強く押し込まれていく。
「終われ！」
「うおおおおおっっ!!!!!!」
　キィンッ！
「あ…？」
「え…？」
「クククククク…面白い…刀を折ったか…」
　顔面蒼白で疾風丸の残骸を見つめ、

「そんな…ここで…終わるのか…?」
と呟く。
「そのようだな…せめて苦しまずに…」
「死ね!」
楓の頭に刀身が迫り来る。それを呆然と見ながら楓の脳裏に一振りの刀が浮かぶ。
「終われるかアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」
叫びながら黒い刀を躱し、続けてもう一振、左腰に吊った刀を引き抜く。
「なっ!?」
「うらぁ!」
楓がそれを振り上げ、それを刹那は仰け反って躱す。
「貴様…その刀は…一体?」
「楓、その刀、ひょっとして…」
「ああ、そうだぜ、こいつは雪乙女。姉貴の名前を持った兄貴の刀。だからこそ見せてやるよ。」
グン!楓の体が一気に前傾し、加速する。
「俺達の本気を!」
「舐めるなあ!」

ドスゥッ!二人の刀が同時に突き出され、黒い刀が刃をしたに、雪乙女が刃を上にして互いの腹に突き刺さる。
「ぐ…」
刹那の力が緩み、刀から手が離れる。しかし楓は話すどころか逆に力強く握りしめる。
「しまっ…」
「まだだぜ!」
楓の全身からスパークが散り、筋繊維が全力で収縮と弛緩を行う。
「おおおおッ!活心最終奥オォ義!」
全力で刹那の体に突き刺さった雪乙女を振り上げ、上半身を真っ二つに叩き斬る。
「さてと…邪魔者もいなくなったことだし、今なら四神一人で閉じられる。」
「うちかて一応力を預けられとる身や、手助けぐらいならできるで?」
フウ。と一息つくと楓は言う。
「それじゃあ、手伝ってくれよ。終わらせるからよ。」
・・・・・・
報告書
我々が駆けつけたとき、全ては終わっていた。

三種の神器、草薙明人、八神夕子、二階堂優作は草薙京に介抱されているところを確認、

当人らの意識はなかったが病院に搬送、現在治療を受けているが命に別状はなく、また、時間こそかかるが

後遺症も残らないような程度の負傷。

次期ボンゴレ上層部たる沢田吉久、獄寺弘、山本宏人、はボンゴレ十代目、沢田綱吉によって病院に搬送、

やはり治療を受けており、命に別状はない。

ボンゴレ雨の守護者、山本武は蒼月楓を担いで自力でビルから脱出。

また、かつてカイン・R・ハインラインが居城としていたビルの１０階には戦闘の跡もあり、非常階段を上ったすぐの所に

上半身を真っ二つにされた斬殺体があったことから、主催者との戦闘があり、その結果主催者が死亡したことが伺える。

追記―今回の潜入調査に協力していただいた方々にこの書面を借りて謝意を表させていただく。

ツァイス・ヴィオレント少佐。

ENDING　そして…

大会とその後の騒動も収まり、彼等はそれぞれの日常に戻る。

カイルは両親の元に戻り、静かにひっそりと暮らしている。しかしときどき栄助のところへ遊びに来ているらしい。

レイズはカツアゲで生計を立てているようだ。かつてシバキ倒した高山達と似たような生活になりつつある。

怒チームの面々もそれぞれの生活に戻り、商談やら任務やらで忙しい日々を送っている。

ユウキとアイはパオパオカフェの常連としてときどき食事に来ているらしいが、エージェントの仕事の方は最近ないらしい。

ロックとレインは大会終了後に出社してみるとカンカンに怒ったビリーに待ち伏せされ、お仕置きされたそうだ。

また、明人は正式に草薙流伝承者の座を継ぐことが決まり、同じく八神流伝承者の座についた夕子と切磋琢磨する日々を送っている。

吉久もボンゴレの十一代目として高校卒業後に裏社会に打って出るらしく、宏人や

弘、秀人や久といった次期守護者達と共に相も変わらず
リボーンのしごきに耐える日々を送っている。
そして季節は巡り…
・・・・・
ＫＯＦからおよそ半年が過ぎた。季節は冬。
寒空の下、大阪某所にある和風建築の座敷で二人の男がにらみ合っていた。
「おいアッシュ。これは俺が先にとった伊達巻きだ。何挟んでんだよ?」
「そっちこそ、たまのお正月なんだから来客には優しくしてよネッ。」
実家に帰省した草薙京とたまたまフランスから日本にやってきていたアッシュ・Ｃ・ブラントルシュだ。
二人の視線の先には重箱に入った伊達巻き（残り一つ）。
「何やってんだか。親父もアッシュさんもガキみてえに・・・あ、夕子、ちょっとその黒豆とってくんね?」
「はい。代わりにかまぼことって。」
草薙家＋アッシュ＆エリザベート、息子のジャッロのブラントルシュ一家＋楓＆あかり＋夕子とかなりの大人数でわいわいやっていると玄関の方から
「オーイ、京ー、いるんだろー。」

と、声が聞こえてくる。
「あ、紅丸さんだ。俺ちょっと行ってでてくる。親父もアッシュさんも、その間にその不毛な争いに決着つけといてくれよ。」
はいはーい!と返事をしながらどたどた玄関まで行って明人はガラス戸を開ける。
「明けましておめでとうございます紅丸さん。優作も。」
と、二人に挨拶すると明人の目が後ろの巨大な物に吸い寄せられる。
巨大といっても2メートルあるかないかぐらいの物だが。
「あ、大門さん。おめでとうございます。」
「うむ。こちらこそな。所で、京の奴はどうした?」
「アッシュさんと伊達巻きの取り合いしてます。」
紅丸がその答えに目を丸くし、続けて
「そいつぁ…なんというか…八神ホイホイって感じだな。」
「その庵さんですが、どこにいるんでしょうね?」
「さあな。大方日本のどこかでキョー!とか叫んでんだろうぜ。それより早く中に入ろう。寒くてかなわねえ。」
紅丸達が家の中に入ると明人も続こうとするが
「あれは…先に行ってて下さい。すぐに行きます。」

と、紅丸達を先に行かせる。
「よう、久しぶりだな。元気だったか?」
「はい。お久しぶりです蒼司さん。さ、立ち話もなんだから中に入りましょうか。」
座敷の方から覚醒楓の「いいかげんにしやがれ!」と言う声が聞こえてきたが平和な、のどかな正月である。
・・・・・・
「うう…寒いな、ホント…」
「何言ってやがる。」
「ホントだよ!寒いのなんて当たり前じゃない!冬なんだから!」
「ハハ…とても30代とは思えないな。あの頃のまんまだ。」
並盛町、九条家の玄関先で話しているのは家主の九条翔と氷華、そしてかつて二人が別の名前を名乗っていた頃の友人、マキシマだ。
「ふん、まあいい。早く中にはいんな。餅ぐれえなら出してやるよ。」
「そいつはすまねえな。所で、跳ねっ返りのガキはどうした?」
栄助か?と翔が返し、氷華が
「お正月なのに部活だってさ。サッカーは冬がシーズンだから大変らしいよ、おじさん。」

「おじっ、あのなあ。せめてマキシマおじさんとかいってくれよ。おじさん単体じゃどうにもな…」

　そんな様子を背に、翔は台所の方へ歩いて行く。

「けど、あのK'が積極的になるとはな。やはり、奥様のお陰ですかな?」

「へへっ。かもね?」

　何してやがんだー?早くこねえとタバスコかけて焼いてやる!などという叫びを聞き、マキシマが慌てて

「かけるんなら黄粉にしてくれ!それか砂糖醤油か!頼むからタバスコはやめてくれ!」

　と言いながら台所に駆け込んでいく。

「クスクス…二人とも面白いなー…あっ!私もお餅食べるー!」

・・・・・

「なんか…一瞬で中華まん、消えちまったな。」

　栄助が少し後ろめたそうに言うが、吉久達は平然と

「もぐもぐ…俺は問題ないと思うけど…」

「若大将の言うとおりだ。コンビニはもぐもぐ買ってもらうためにもぐもぐ商品並べてるんだからよ。ゴックン。」

食べるか喋るかどっちかにしてくれよ。と呟いて栄助は視線を前にやる。と、宏人が少し焦って声をかけようとするが間に合わず。

ツルッ！ガン！視界から外れた凍っている水たまりに足を取られて思いっきり転んだ。

「いってぇ…」

「大丈夫か？」

と質問する宏人の肩を借りて立ち上がるとあることに気付く。

「あれ？俺のカレーまん…」

「安心しな。お前は無事じゃねえがカレーまんは無事だぜ？」

そういってカイが右手に持った自分の肉まんと一緒に左手にある食いかけのカレーまんを掲げてみせる。

「どっちかっつーと俺を支える位してくれてもいいと思うんだけどな。」

カイはそうぼやくと、空に向かって白い息を吐いた。

・・・・・

「明人、ちょっと外、出ようよ。なんか怖いことになってきた気がする…」

「俺さんまで来て阿鼻叫喚だな。よし、じゃあ俺らだけで初詣行くか。」

キョオオオオオオオオオオ！ほうりゃあ！せやあ！などなど。京、庵、アッ

シュの叫び声と共に色とりどりの炎が飛び交い、その度にエリザベートとユキがしかりつけるがすぐにまた大ゲンカ。いつの間にやら仲裁に入っていたはずの紅丸まで参戦している草薙家の惨状からこっそりと抜け出すと

二人は近くの神社までの道のりを歩く。

「なあ、あの二人、一生あのままなのか？」

「もはや三人になりつつあるけど…」

「まあ、俺はあんな事になるつもりはさらさらないけどな。」

「同感ね…」

しばらく無言のままで並んで歩く。一月一日、本当に正月の午前中ではあるが小さな神社なので人はそんなにいない。

「よし！このＫＯＦ優勝者の俺が宣言してやる！これからも俺が死ぬまでお前を守り続けてやる！」

いい加減沈黙に耐えられなくなったのか明人が真っ赤な顔で宣言すると夕子も顔を赤くして頷く。

「なんだかお邪魔みたいな気もするけど…仕方ないか。」

「楓先生！あかりさんも。もっ、もしかして今の俺の台詞…全部聞いてました？」

「ひっじょーに言いにくいことやけどな。ごめん、聞こえてしもた。」

恥ずかしさのあまりうがあああ！と両手で頭を抑えて悶絶する明人を放って置いて楓は
「僕もあかりさんに同じ事を誓おうかな…」
などと呟くがあかりはしっかりとその呟きを聞きつけて
「かっ、楓!?それはぷっ、ぷろぽーずちゅーやっと受け取っても、かっ、かまわへん!?」
と楓に詰め寄る。
「えっ！ええまあ…っていうか聞こえてたんですか!?」
「なんだ、楓先生も一緒じゃん。」
復活した明人が楓にぐさりと言葉を突き刺すと今度は楓が悶絶する。
「ちょっと明人、ひどくない？」
「しかえししかえし。」
さっさと境内に入っていく明人が１０円玉四枚と5円玉一枚を夕子に渡す。
「ほら。始終ご縁がありますように…ってな。」
「以外に験担ぎなんだね。」
「いいじゃねえか。」
・・・・・
「いっつつつ…」

「おいおい、大丈夫かよ栄助。」
「何でもねエよマキシマさん。」
栄助達は自分たちの家族と、ついでに矢吹家の面々を誘って初詣に来ていた。
「いいかてめえら！十代目もよく聞いて下さいね！賽銭は４５円！始終ご縁があるようにだ！」
と力説する隼人に対し、めんどくせえなと吐き捨てる翔だがしっかりと財布から４５円取り出しているあたりしっかり話を聞いていたのだろう。
「今年こそ！」
「今年こそ草薙さんに追いつけるように…でしょ？」
早速新年の抱負を妻に言い当てられている矢吹真吾や無難に家内安全を願おうとする親子同時に石につまずき、氷に追い打ちをかけられて
すっころび、京子に早速心配をかけている綱吉と吉久。
ああっ、くそっ。などと悪態をつきながら財布の中の小銭相手にその太い指で奮闘するマキシマ。
なんにつけ、ボール一個分外れた普通の正月だ。
・・・・・・
これは偶然の符合であるのだが、大阪で明人と夕子、ついでに復活した楓とあかりが

手を合わせたのと
並盛で後頭部を押さえながら吉久と弘が賽銭を投げ込み、手を合わせたのは全くの同時だった。
（来年もいい年でありますように…）
the end!
教官出てくんな。テイク2。
fin…

スタッフロール

脚本　昆布さん
演出　昆布さん
原作
ＳＮＫプレイモア
天野明
制作　昆布さん
出演
ｔｈｅ　Ｋｉｎｇ　Ｏｆ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓ
草薙京「燃えたろ?」
二階堂紅丸「ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ!」
大門五郎「ん、まああぁっ!」
矢吹真吾「よぉーっし!やりましたよ!草薙さん!」
テリー・ボガード「ＯＫ!」
アンディ・ボガード「資質だけでは勝てはしない!」

ジョー・東「おっしゃあ！がっはははは！」
不知火舞「いよっ！日本一ぃ！」
リョウ・サカザキ「おぉすッ！」
ロバート・ガルシア「どないや！」
ユリ・サカザキ「余裕っチ！」
キング「甘く見られたものね！」
K'「お家にかえんな。」
マキシマ「俺は火遊びが好きなんだよ。」
クーラ・ダイアモンド「ふーっ、バイバイ！」
ウィップ「這い上がれば？糸は垂れてるわ。」
麻宮アテナ「やったぁ！かーんぺき！」
椎拳崇「やったで！」
アルバ・メイラ「拍子抜けだな。」
ラルフ・ジョーンズ「イエーイ！任務完了！」
クラーク・ステイル「任務完了！」
レオナ・ハイデルン「任務、完了。」
フィオリーナ・ジェルミ「め、メタスラさえあれば負けませんよ！たぶん。」

キム・カッファン　「なかなかのお手前で。」
チャン・コーハン　「やったぜ、コーハン！」
チョイ・ボンゲ　「惨害、旋回、爽快でヤンス！」
ジョン・フーン　「戦う以上は勝たなくてはね。」
八神庵　「月を見るたび思い出せ！」
ネームレス　「俺は自分を超えて進化し続けている…！」
クリザリッド　「こんなモノで勝てるのか？」
タクマ・サカザキ　「覇王翔吼拳を会得せぬ限り、お前はわしには勝てぬわ！」
草薙柴舟　「熱かったか？すまんすまん。」
ハイデルン　「任務、続行せよ！」
ロック・ハワード　「シャンとしな！」
キム・ドンファン　「ま、トーゼンの結果ってヤツ？」
キム・ジェイフン　「ングッ、ングッ、ングッ、よし！」
北斗丸　「イェーイ！大！勝！利！」
双葉ほたる　「ふぅ…ごめんね…」
エリザベート・ブラントルシュ　「あなたの生き様、見せて頂きました。」
シェン・ウー　「もう一戦やろうぜ？」

デュオロン　「当然の結果だ。」
アーデルハイド・バーンシュタイン　「当然の結果だ。」
アッシュ・クリムゾン　「結構良いセン、行ってたんじゃない？」
ビリー・カーン　「ＧＯ　ＴＯ　ＨＥＬＬ！」
山崎竜二　「このカスが…ッ！」
藤堂香澄　「極限流、たいしたことないな！」
ソワレ・メイラ　「上から目線で偉ぶってみたが、子猫のように大人しくなってるぜ！」
包　「どう？まだやる？」
桃子　「桃子のこと、キライにならないでね？」
ダック・キング　「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ａｎ　ａｎｇｅｌ　ｂａｂｙ！」
ジヴァートマ　「クシエルを統べる闇の爪、ジヴァートマと見知りおきいただこう」
ルガール・バーンシュタイン　「君の死に場所はここだ！」
イグニス　「人は何かを成すために生をうけ、成し終えたとき死んでゆく。」
ＡＫＯＦ
アネル・ロランジュ　「うつけが！」
ゾディアック・ロランジュ　「こんなまがい物では、我が飢餓は癒されぬ」

家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！
沢田綱吉　「か…勝てたぁ…」
獄寺隼人　「ボンゴレなめんじゃねエ！」
山本武　「時雨蒼燕流は、完全無欠、最強無敵だ！」
笹川了平　「ぬおおお！極限！」
雲雀恭弥　「ワオ、まだ立ち上がるんだ？」
六道骸　「墜ちろ、そして巡れ。」
柿本千種　「・・・・・」
城島犬　「へっへーん！どうれすか？骸さん！」
フラン　「めんどくさいんでミーは帰っても良いですかー？」
ＸＡＮＸＵＳ　「・・・・・カスが」
Ｓ・スクアーロ　「お〝おい！もの足りねえぞぉ！」
ベルフェゴール　「ししっ、お終〜い。」
マーモン　「金にならない仕事は御免だよ。」
白蘭　「結構面白かったよ♪」
桔梗　「ハハン。いかがでしたか？我々の力は。」
ザクロ　「面白くねエな。立てよバーロー」

古里炎真　「あれ…？なんか、勝ってる…？」
鈴木アーデルハイト　「粛として清まりなさい」
加藤ジュリー　「ねねねね君、これからどっか遊びに行かない？」
青葉紅葉　「結局僕が勝つのだ！」
バジル　「やりました、親方様！」
イェーガー　「我、バミューダの輝きのもと復讐する者。」
月華の剣士
楓　「そこで眠ってな！」
一条あかり　「よっしゃあ！びくとりーや！」
嘉神慎之介　「塵となれ、エゴの塊よ！」
紫鏡　「いいっ！このっ斬り心地ッ！やっぱ男より、女あああ！」
刹那　「命の証とは…なんだ！」
オリジナルキャラクター
草薙明人　「へへっ、燃えたろ？」
八神夕子　「そのままにしていて。」
二階堂優作　「ははは っ。俺の勝ち！」
沢田吉久　「なんとかなるもんだな。」

獄寺弘　「どうですか、若大将！煙で見えなかった？そんなあ。」
山本宏人　「強かった？俺の剣。自分じゃよく分かんなくってさあ。」
九条栄助　「どいつもこいつもおっかねえの。おお怖。」
カイル・ロランジュ　「だいぶ制御できるようになってきたな…」
レイズ・K　「うっせェ！テメエもブッ飛ばすぞォ！？」
ツァイス・ヴィオレント　「どうだ！大佐直伝ギャラクティカ！」
藤堂カズヤ　「ありがとうございました！」
ネロ・バーンシュタイン　「やるじゃねえか。俺ほどじゃないにしてもな。」
ユウキ　「I’ｍ　ｎｏｔ　ｂｏｙ！」
アイ　「ごめーん！わざとじゃないんだよ？」
レイン・ハワード　「いっただろ？ひと味違うのさ。」
勇人・S・ガルシア　「どないしたんや？」
ゴウ・疾風　「うおおお！凄い漢だああ！」
坂崎カイ　「これが俺の！極限流だ！」
矢吹圭太郎　「いったたた…良いセン行ってたじゃないか！次はもっとああ待って待ってまだ台詞の途中」
大門虎五郎　「心が全てを決める。精進なされよ。」

麻宮ケイタ　「やっぱ吹っ飛ぶな…あ、いや。こっちの話だ。」
麻宮龍太郎　「どうや！オレの必殺超球弾！」
雲雀秀人　「群れないでね。咬みちぎりたくなる。」
六道久　「うちの委員長が申し訳ございません。」
草壁達也　「風紀副委員長権限でお前を処分する！」
以上で、お送りしました。
この物語はただのファンフィクションな上にとんでもない駄文でした。
実在の人物、団体には一切関わりなく、ゲームにも露程しか関わりがありません。
背景ＢＧＭ「ｔｅａｒｓ」ｔｈｅ　Ｋｉｎｇ　Ｏｆ　Ｆｉｇｈｔｅｒｓ９９より、草薙京のテーマ

K’―九条翔のトラウマ

ちっ。

小さく舌打ちして九条翔はこめかみのあたりを抑えた。

「どしたの?」

氷華が聴いてきたので翔はソファに横になりながら

「飲み過ぎちまったらしい。ちょっと寝る。」

と答えた。

返答を聴かずに翔の意識は沈んでいく。深い眠りへと…

・・・・・

それは彼がまだK’と名乗り、当時クーラ・ダイアモンドと名乗っていた氷華やM型改造人間であるマキシマと共に各地を転々としながら暮らしていたときのことである。

がっしゃあん!

K’の蹴りがテレビをぶちこわした。

「あーー!なにすんのよ!」

クーラが怒鳴るとマキシマも

「ったく…明日の天気がわからなくなっちまったじゃないか。」
と非難してくる。
しかし当のK，は
「うるせえよ。」
と呟いて両手をポケットに入れてぶっきらぼうに吐き捨てた。
「年末特番だかなんだかしらねえがあんなもん流してるテメエらが悪い。」
不機嫌に言い返すK，にマキシマはニヤリと笑って
「なんだ?おまえああいうのが怖いのか?」
と聞く。それに対して怖いんじゃねエよ。というとK，はさらに
「俺の嫌いなあいつみたいだからやめろっつったんだよ。」
と、さっきまでテレビで放送していた大友克浩原作のアニメ『ＡＫＩＲＡ』に悪態をつく。
「言わないでよ。思い出しちゃったじゃない。」
「まあ、たしかにあれをつけてたのは刺激以外の何でもなかったかな?」
三人の頭の中に浮かび上がった広い額の少年。
Ｋ９９９９がえらいことになった左手を振り回し、
「うるさあーい!」だの「割れろォ!」だの「あっち逝ってろォ!」だの騒いだあとでＫ

，に蹴り飛ばされて「いでェじゃねエかよ！」と叫ぶ姿が共通してイメージされていた。
と、ご近所のドアがぶち破られる音と聴きたくなかった声が響く。
ちきしょう！ここじゃねえのかよ！
「ねえ、ひょっとしてこれって…」
「おいおい、噂をすれば何とやらって奴か？」
「いうんじゃねえ。」
そしてのりこんできたＫ９９９９のせいで三人は隠れ家を変えなければなりませんでしたとさ。
・・・・・・
「!!!!」
ソファから跳ね起きた翔はきょろきょろと周りを見回し、夢か…と呟いた。
「クソ…まだ頭がガンガンしやがる…一ペン風呂入ってこよう。」
と、居間からでようとした瞬間、
〈がーきーどーもー！〉
という聴きたくなかった叫び声が聞こえ
「シャラアアアアアアアアッ！」
反射的にミニッツスパイクで声の発信源―年末特番でＡＫＩＲＡをやっていたテレ

ビーを蹴り飛ばした。